
クーデタとその後

—タイ陸軍の人事異動と政治介入—

玉田芳史

| | |
|----------------------------------|-----|
| 1. はじめに | 152 |
| 2. 2006年クーデタと人事異動 | 155 |
| 2.1 陸軍の組織と人事異動 | 155 |
| 2.2 タックシン政権下の軍人事異動 | 158 |
| 2.3 クーデタをめぐる人事異動 | 163 |
| 3. クーデタ後の人事異動 | 165 |
| 3.1 タックシン派の粛清 | 165 |
| 3.2 「東部の虎(burapha phayak)」 | 167 |
| 4. もう1つのクーデタ：再民主化後の政治介入 | 171 |
| 4.1 サマック政権下(2008年2月～9月) | 171 |
| 4.2 ソムチャーイ政権下(2008年9月～12月) | 173 |
| 4.3 アピシット政権下(2008年12月～) | 175 |
| 5. 第2歩兵師団色の陸軍 | 176 |

1. はじめに

タイの軍隊は2006年9月19日にクーデタを執行した。1992年以来久しぶりの公然たる政治介入であった。軍隊はすでに混乱していた政局を打開するどころか、一層の混迷を招いているように見える。問題解決能力が足りないにもかかわらず、介入を止めることができない。泥沼の政治介入と述べても過言ではない。なぜ政治介入を続けているのか、続けることができるのか。

まず2006年クーデタ以後の政治を簡単に振り返っておこう。クーデタを実行したのは「国王陛下を元首とする民主主義体制改革評議会 (Council for Democratic Reform, CDR)」を名乗る組織であった。CDRは陸海空の3軍と警察の首脳から構成されていた。CDRの狙いは2001年から政権を担当していたタックシン・チンナワットとその支持者の勢力を一掃することであった。駆除作業に必要と思われる法律や制度を整えるために、CDRは9月30日までの10日ほどの間に32の布告と20の命令を出した。CDRは10月1日には、枢密顧問官で元陸軍総司令官のスラユット・チュラーノンに政権を委ね、自らは国家安全保障評議会 (Council for National Security, CNS) に衣替えして政権の後見役となった。スラユット政権下では、1年ほど先の総選挙実施を視野に入れて準備が進められた。一方では、安定した政権や強い指導者の登場を阻止するために、新しい憲法、選挙法、政党法といった政治関連法の整備が図られた。その中心をなすのは2007年憲法であった。他方では、タックシンの刑事責任追及、その与党タイラックタイ党 (Phak Thai Rak Thai, TRT) の解体、タックシンへの批判キャンペーンなどが行われた。07年5月30日には憲法裁判所が、TRT解党判決を下し、CDR布告に遡及効を認めて同党幹部111名の政治的権利を5年間停止した。その2週間ほど後の6月12日には、政治資金を枯渇させるために、タックシン一家の資産を凍結した。

党首の統制術と資金力で多数の派閥が束ねられていたTRTからはいくつかの派閥が離脱して新党を結成することになる。しかし、大半の議員は国民の力党 (Phak Phalang Prachachon, PPP) へ移籍した。TRT幹部の大半が立候補や入閣の資格を喪失したため、PPPの党首にはサマック・スントーラウエートが迎えられた。サマックは人後に落ちない王党派として著名であり、左翼の影響を受けた共和主義者 (王制廃止論者) という定型化したタックシン批判に立ち向かう盾として、うってつけの人物であった。

CNSは、農村部に兵士を派遣して住民向けにタックシン批判のキャンペーンを行い、兵士にはPPP以外の政党へ投票するように命令を下した。しかし、07年12月23日実施の総選挙では、PPPが480議席中233議席を獲得した。第2党の民主党は165議席にとどまり、PPP主導の連立政権が発足することになった。2008年2月に発足したサマック政権は、

選挙公約に掲げた憲法の改正に乗り出そうとした。2月28日にはクーデタ以来亡命状態にあったタックシンが帰国した。

2006年クーデタを実行したPPP勢力、支持した勢力にとっては、タックシン復権は容認しがたいことであった。反PPP政権の中核は、05年から翌年のクーデタにかけてタックシン政権打倒運動に邁進した「民主主義のための国民連合」(phanthamit prachachon phua prachathipatai、以下では連合)を名乗る勢力であった。連合が目指したのはPPP政権の打倒であった。裁判所に頼って与党を解党に追い込んで、党役員の議員資格喪失に伴って首相が交代するだけであり、タックシン派政権が続く。確実に倒す方法は06年と同様にクーデタである。連合は08年5月25日から首相府前の路上で集会に突入り、8月26日には首相府を占拠し、ついに11月には国際空港を封鎖に追い込んだ。軍隊はクーデタの誘いには乗らなかったものの、08年12月2日に憲法裁判所が与党PPPの解党判決を下すと、翌日から政党政治家への活発な働きかけを行い、与党議員の一部を民主党支持に寝返らせて、政権交代を実現した。

チャー・ノイのペンネームを用いるタイ研究者は、民主党政権が誕生した直後の2009年2月に、「過去3年間の政治混乱から大きな勝者として抜け出てきたのはタイ軍であった」と指摘した。「成功の証として最も目立つのは予算である。」2006年度から2009年度の間、国防予算は850億バーツから1670億バーツに、治安維持予算も770億バーツから1140億バーツへと増えており、増加率は群を抜いていた。国家予算に占める国防費の割合は1991年の19%から2006年の6.3%へと減り続けていたものが、09年には9.1%へと持ち直した。予算に加えて、法制面でも成果があった。クーデタ後の政権下で3つの法律が成立した。第一は治安維持における軍隊の役割を拡大する国内治安法である。軍隊は麻薬、不法移民、災害、貧困などに取り組む権限を付与された。第二は放送法である。軍隊は首都のVHFテレビ局5局のうち2つを所有し、全国ネットのラジオ放送局を所有している。そうした既得権益への挑戦を、新しい放送法は阻止した。第三に軍隊の人事異動の方法が変更された。2008年2月1日に公布、翌日に施行の新しい規則によると、将官の人事異動は、3軍の総司令官、国軍最高司令官、国防次官の制服組5名に、国防大臣を1名加えた合議で確定されることになった(国防副大臣が置かれる場合には1名増えて7名で構成されることになる)。それまでは制服組と大臣の関係は1対1であり、制服組は圧力に対して脆弱になりがちであった。新しい制度では名簿の確定は多数決で行われるため、政治家と制服組の関係は1(ないしは2)対5となり、制服組の意向が貫徹しやすくなった⁽¹⁾。

しかし、それは戦利品というよりも、厄介な政治的使命遂行への報酬ではなかろうか。軍隊は2006年にはクーデタを実行した。07年にはタックシン支持派の解体に尽力したものの、満足のゆく成果を達成できず、同年12月の総選挙ではタックシン派の勝利を阻止でき

なかった。08年には、首相府や空港を占拠して軍にクーデタ決行を迫る連合を前にして、軍首脳が口々に「クーデタはやらない」という発言を繰り返した。クーデタは犯罪行為である。それをしないのは当たり前である。わざわざ宣言する必要はない。にもかかわらず、何度も発言した。軍隊はクーデタをやりたくてうずうずしていたわけでもない。法外な要望を、無碍に一蹴することができなかったからこそ、「やらない」という断りを公言する必要があった。圧力をかけられるのも、無視できないのも、ともに異常といわねばならないであろう。

クーデタをやらない陸軍総司令官は、テレビを通じて首相に国会解散や辞職を公然と要求（2008年10月ならびに11月）した。9月2日には首相が非常事態を宣言して首相府解放を命じたにもかかわらず、出動を拒否した⁽²⁾。11月には連合による空港占拠解除のための部隊派遣を拒否し、むしろ連合警備のために兵士を空港へ派遣した⁽³⁾。12月には政党政治家に働きかけて多数派工作を行って政権交代を実現させた。喩えていえば、強盗（クーデタ）をやれと求められ、強盗はできませんと言いつつ、公然たる恐喝（国会解散要求や首相辞任要求）や搔っ払い（多数派工作）をやったのけた、ということになる。しかし、軍隊のせいで第2党に政権を掠め取られたと憤る第1党の支持者が反独裁全国民主戦線（naeoruam prachathipatai totan phadetkan haeng chat、以下では民主戦線）を中心として2009年に抗議行動を起こすと、軍隊は連合に示した不作為や協力とは打って変わって断固たる取締りに乗り出した。二重基準が歴然としており、軍隊は厳しい批判を招くことになった。

軍隊がこうした見苦しい政治介入を続けているのはなぜであろうか。本稿では、陸軍の人事異動という観点から考察してみたい。人事異動は軍内政治の最大の争点の1つであるばかりではなく、政治介入にも影響を与える。国際社会はいうまでもなく、タイ国内においても、軍隊の政治介入には否定的な意見が強い。そうした逆風をものもともせず介入するには、反対を押し切る力が必要である。もっともわかりやすいのはクーデタであろう。決行するには勝算が必要である。反対派が優勢であり、抵抗を受ければ、失敗に終わる。戦っても勝ち目はないと納得させ、抵抗意欲を阻喪させることが肝心である。それは司令官に忠実な将校を要職に配置することで可能になる。クーデタに限らず、政治介入全般についても妥当しよう。政治介入をある程度成功裏に行うには、実効性を担保する人事異動が必要なのである。

次節では2006年クーデタと人事異動の関係、続く第3節ではクーデタ後の人事異動の特色について解明する。第4節では、そうした人事異動の反映と思われる2007年12月総選挙後の政治介入を紹介する。最後に、陸軍には、連合の黄色や民主戦線の赤色ではなく、第2歩兵師団の色がついており、それゆえの政治介入を断ちがたいことを明らかにしたい。

2. 2006年クーデタと人事異動

2. 1 陸軍の組織と人事異動

軍隊を管轄するのは国防省である。軍組織の頂点には、2008年に名称をそれまでの最高司令部(kongbanchakan thahan sungsut, Supreme Command Headquater)から改めた国軍司令部(kongbanchakan kongthap thai, Royal Thai Armed Forces Headquater)があり、その下に陸海空の3軍がおかれる。行政的には、3軍の総司令官の上に、同じく制服組の最高司令官(司令部の名称変更後も役職名は変更なし)や国防事務次官が位置する。しかしながら、3軍と警察の間では陸軍の政治力が群を抜いて強く、軍の最高実力者は陸軍総司令官である。

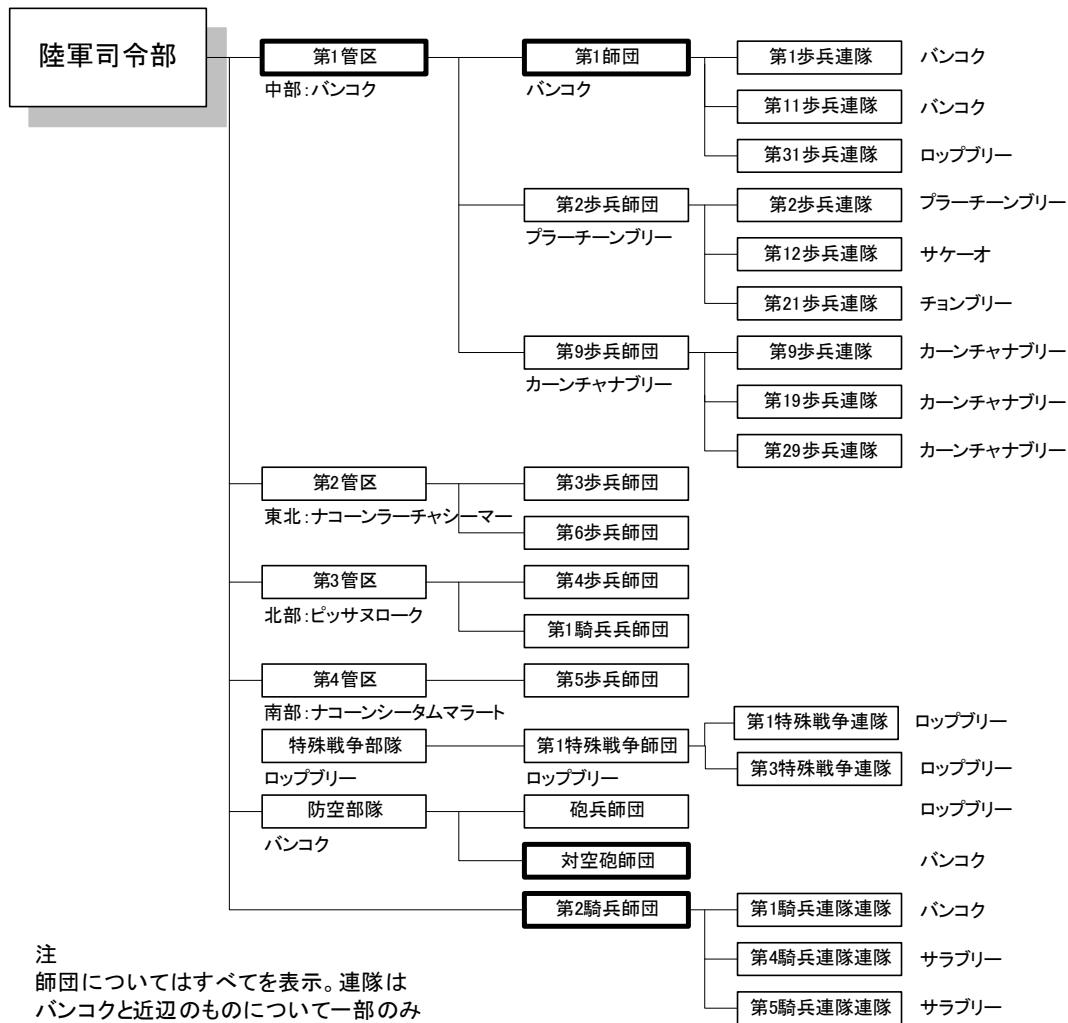
陸軍は1932年6月24日に海軍とともに立憲クーデタに参加して政治に深く関わるようになり、06年までに合計11回のクーデタを成功させてきた。当初は陸軍にひけを取らなかった海軍は、第二次世界大戦終了後の権力闘争で致命的な敗北を喫した。空軍は誕生が1937年と新しく、政治的には陸軍の後塵を拝してきた。警察は近年独立の官庁になるまでは久しく内務省の所轄となっており、国防省から自律性を保持していたものの、政治的には1957年クーデタ以後陸軍への服属を強いられてきた。

陸軍は中部、東北、北部、南部の順に全国を4つの区域に分けて、第1、2、3、4管区をおいている。それぞれの司令部はバンコク、ナコーンラーチャシーマー、ピッサヌローク、ナコーンシータムマラートにおかれている。首都に司令部がおかれる第1管区には首都駐屯の第1師団、東部プラーチンブリー駐屯の第2歩兵師団、西部カーンチャナブリー駐屯の第9歩兵師団の3つの師団が所属する。それぞれの師団には3個の歩兵連隊と1個の砲兵連隊が所属している。第2管区にはナコーンラーチャシーマーの第3歩兵師団とローイエットの第6歩兵師団、第3管区にはピッサヌロークの第4歩兵師団とベッチャブーンの第1騎兵師団、第4管区にはナコーンシータムマラートの第5歩兵師団が所属する。これら4つの管区に相当すると見なされる実戦部隊として、首都から150kmほど北のロップブリーに司令部が置かれる特殊戦争部隊と首都に司令部がおかれる防空部隊がある。前者にはロップブリー駐屯の第1特殊戦争師団、後者には首都駐屯の対空砲師団とロップブリー駐屯の砲兵師団が所属する。まとめると、管区は6つ、実戦師団は12個ある。これらの管区や師団には軽重の差がある。それは人事異動に反映されている。

将官の人事権は2008年に見直しが行われるまでは、国防大臣にあった⁽⁴⁾。人事異動名簿は、総司令官がスタッフと相談しつつ作成し、国防大臣の承認を得て、国王の裁可を得るという手順になっていた。08年以後は3軍の総司令官が異動名簿を持ち寄り、最高司令官、国防次官、国防大臣が同席する会議で最終的に決定することになった。従来も現在もいず

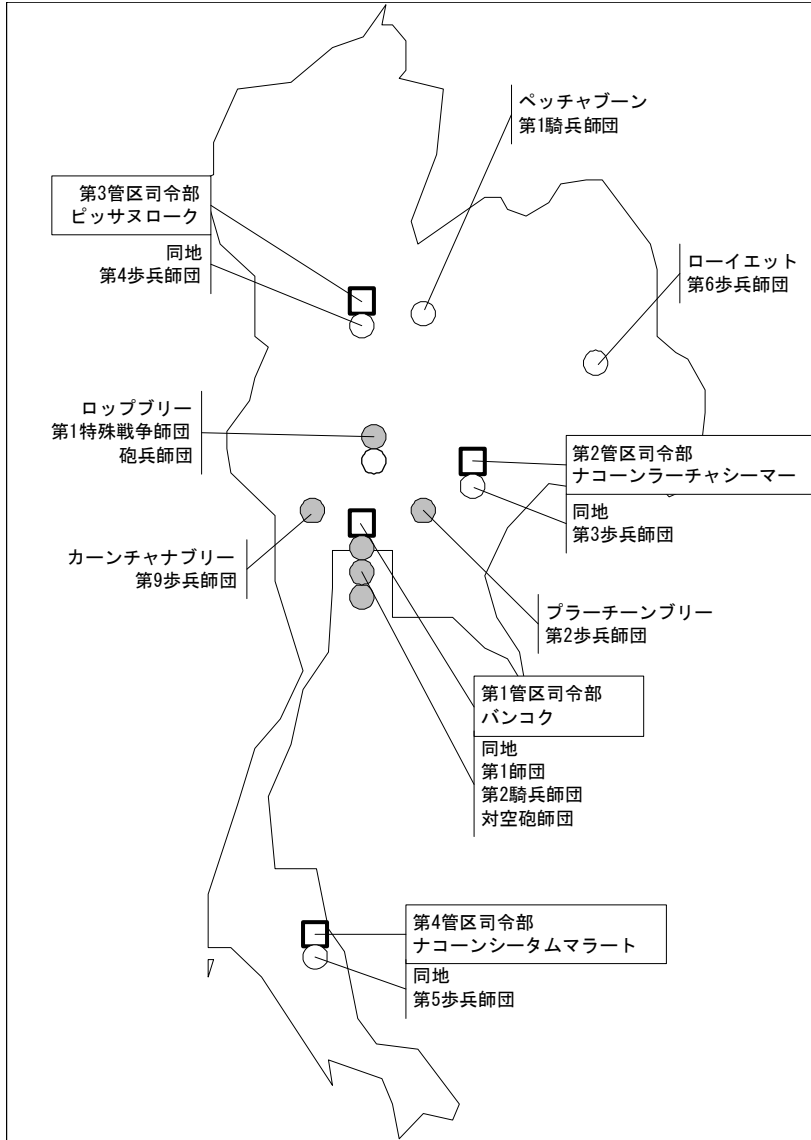
れも、実質的な人事権は総司令官にあることに変わりはない。定期異動は、会計年度の変
わり目となり、定年退職者が出る10月1日付けで毎年行われる。年度半ばの4月1日にも
それ準ずる規模の異動が行われる。近年の定期異動の規模は軍全体では、07年10月463名、08
年4月383名、同年10月556名、09年4月454名、同年10月568名であった。他方、佐官の人事
権は総司令官にあり、将官の人事異動の後に実施されることが多い。

図1 陸軍部隊編制図



注
師団についてはすべてを表示。連隊は
バンコクと近辺のものについて一部のみ
を表示(歩兵師団所属の砲兵連隊は省
略)。首都と近辺に司令部がある部隊に
ついてはその所在地を表記した。

図2 管区と師団の司令部所在地



陸軍の頂点には総司令官がおり、その周囲に副総司令官、参謀長、総司令官補佐(2名)という4名の最高幹部がいる。これら5名は5虎将(5 sua)と呼ばれる。中將の出世頭が参謀長か総司令官補佐として5虎将に加わり、最後は総司令官に就任することになる。そこへ至るルートは、過去の事例から確認してみると、実戦部隊指揮官コースと参謀コースの2つがある。前者は、大隊長(中佐)、連隊長(大佐)、師団長(少将)、管区司令官(中將)を経て5虎将にたどり着く。管区司令官就任前の腰掛けポストとして旅団長(中將)を経験するものもいる。後者は、作戦部長や教育部長などを務めた後、参謀長補佐(中將)、副参謀長(中將)を経て、5虎将の仲間入りをする。

将校はそうした出世ルートに乗るべく鎬を削る。出世は軍人としての権力や名誉に加えて、政治権力や経済的な利権にもつながりうるので、競争が熾烈になる。この出世競争において重要なのは、陸軍士官学校の同期生ないしは同じ部隊での勤務(上司・部下、先輩・後輩)という同じ釜の飯を食った経験である。同期の出世頭や部隊の上司が出世すれば、ほかの仲間を引き上げてくれるので、協力してその出世を助けようとする。1990年代以後2009年までについてみると、総司令官は12名おり、その学年は陸士1、5、6、9、12、14、16、17、21期生であった。すべての学年から総司令官が出るわけではないので、学年ごとの競争が生まれる。

12名中、実戦部隊指揮官コースを歩んだものは8名おり、3つの管区の司令官から出ている。首都の第1管区4名、東北の第2管区3名、特殊戦争部隊3名である。第2管区司令官のうち2名は特殊戦争部隊司令官からの横滑り就任であった。これら8名の管区司令官は、4名が第1師団、3名が第1特殊戦争師団、2名が第2歩兵師団、1名が第6歩兵師団の師団長を経験していた。第1師団長の中には、第2歩兵師団長と第1特殊戦争師団長を前職とするものが1名ずついた。第6歩兵師団長は、元来は第1師団第1歩兵連隊に所属していた将校である⁽⁵⁾。従って、師団でいえば、総司令官まで出世しようと願うものは、第1師団、第2歩兵師団、第1特殊戦争師団のどれかに配属されることが望ましかった。いずれも政治権力の中心、クーデタの舞台となる首都もしくはその近辺の部隊である。

2.2 タックシン政権下の軍人事異動

軍隊との関係において、タックシンの大きな特色は彼が軍予科学校の卒業生という点である。軍予科学校は高等学校に相当し、その卒業生が陸、海、空、警察の士官学校へ進学する。タックシン自身は警察士官学校へ進学して警察官になった。しかし、同級生(予科10期生)の多くは軍隊の士官学校へ進学し、軍将校になった。陸軍では陸士21期生である。タックシンは警察官退職後に実業で稼いだ資金を生かして2001年に首相に就任した時には51歳であった。同期生たちは60歳の定年退役まで10年を残して、軍隊や警察でいよいよ中枢部のポストを得ようとしていた⁽⁶⁾。現役将校に多数の同期生を擁する年齢50歳ほどの首相は、1960年代のタノーム・キッティカチョーン以来であった。

タイの軍隊は、1992年以後政治の舞台から退いていた。クーデタを決行しないだけでなく、軍首脳が政治に口出しすることもほとんどなくなった。この変化は、政治家が軍隊の人事異動に介入する必要性ならびに能力の低下と関係していた。まず重要なのは、1992年に憲法の一部修正が行われて、首相が民選議員に限定されたことである。王室や軍隊をはじめとする国会外の勢力が首相の人選を左右したそれまでとはすっかり様変わりした。

政治指導者は選挙を通じて権力を獲得し維持する。軍隊に依存した1980年代のプレーム政権時代のように、忠実な将校を軍指導者に任命し、その勢力拡大を助けて、政権の確たる支えとする必要はない。クーデタを執行しかねない血気盛んな将校を陸軍総司令官に就任させないように、陸軍総司令官に権力が過度に集中しないように、配慮すれば十分であった。人事異動に介入する必要性が低下したのである⁽⁷⁾。第二に、介入する能力も低下した。軍隊を支持基盤としうる政治家は退役軍人、とりわけ陸軍総司令官経験者である。アーティット、チャワリット、チェーターがそうである。彼らが仮に人事異動に干渉する機会を得たとしても、もっとも頼りになる同期生はすでに退役してしまっていた。

タックシンは人事異動に介入する潜在的能力がきわめて高かった。これは予科10期生以外の将校にとっては懸念材料であった。政治家や軍人との人脈を通じてたえず軍中枢部に忠臣を送り込んできたプレーム枢密院議長にとっても脅威となりえた。とりわけ2002年10月の定期異動で、側近のスラユットが定年まで1年を残して陸軍総司令官を更迭され、先例に反して後継首脳部の人事検討作業から排除されたことは、軍隊や政界で尊敬される枢密院議長を蔑ろにする行為であった。タックシンを牽制しようとする勢力が登場しても不思議ではない。たとえば2006年クーデタ直前には、4名の将官が異動の不当さを枢密院議長に直接訴え、さらに枢密院議長と個人的に近い国防副事務次官が次官に昇進できないことの不当さを厳しく批判した⁽⁸⁾。彼らが批判を向けたのは、タックシンによる強引な人事介入であった。出世競争には敗者がつきものであり、敗れたものの中には人事異動の不当さを批判するものもいる。しかし、副次官はクーデタ後の人事異動で次官昇進を果たせなかったものの、それを批判することはなかった。政治的な色合いの濃い行動であったことを窺わせる。

そうした当事者のみならず、研究者の中にもタックシンによる不当な介入を指摘する声がある。タイの政軍関係に詳しいチュラーロンコーン大学のウクリットは陸士21期生が「第1管区、第2管区、第3管区の司令官、参謀長、総司令官補佐、第1歩兵師団長」といった重要なポストを短期間のうちに握ったと記す⁽⁹⁾。それは事実であろうか。タックシンは同期生による要職独占を異常なまでに進めたのであろうか。「異常」には2通りの意味合いがある。1つは数である。たとえば12の師団の司令官うち何人を、6つの管区司令官のうち何人を握ったのか。もう1つは速度である。特定の学年は年次進行と共に重要なポストを握り、最後は定年によって去っていく。50歳代前半で師団長になり、50歳代後半にはいると中将や大将のポストを握るのは自然なことである。

この2つの観点からタックシンの同期である陸士21期生の動きを眺めてみよう(表3参照)。2002年10月の人事異動で2名の師団長が誕生した。翌年も2名のままであり、04年には5名に増えた。5名という人数は2006年9月のクーデタ勃発時まで変化しない。12名

中5名というのは確かに多い。しかし、異常なのであろうか。その判断には比較が不可欠である。たとえば、05年10月には陸士22期生も5名の師団長を出していた。また、陸士23期生は06年10月には7つ、07年10月には5つの師団長ポストを握っていた。過去に遡れば陸士11期生は91年10月に13名⁽¹⁰⁾の師団長のうち6名を、陸士5期生は85年10月に13名の師団長のうち10名を占めていた。また、陸士21期生は05年10月には大將ポストの総司令官補佐1名のほか、中將ポストでは参謀長補佐1名、管区司令官1名、旅団司令官1名を出す。ウクリットが示す情報とは大きく相違しており、格別多いとはいえない⁽¹¹⁾。たとえば陸士19期生は05年10月には副参謀長1名、参謀長補佐1名、管区司令官1名、旅団長2名を出しており、21期生と大差があったわけではない。21期生については、むしろタックシン失脚後の08年10月のほうが集中が顕著である。すなわち、総司令官と総司令官補佐、副参謀長を各1名、参謀長補佐2名、管区司令官2名、旅団司令官2名となっている(表3参照)。これらの点から、06年9月クーデタ以前には、人数の点では陸士21期生への集中は異常とはいえないことが明らかである。さらに、就任の時期についても、陸士21期生の場合には、年齢不相応に格別早いとはいえない⁽¹²⁾。06年7月に、予科10期生の陸軍少将は「タックシンは首相をすでに5年間務めている。不当な人事を行ってれば、我々の学年はみんなもっとよいポストに就いているはずだ」と、また第2騎兵師団長は「人事異動のときにはなぜかいつも目の敵にされる。10期生はずっと抑えつけられてきた。我々の学年はあと3、4年もすれば定年退職だ。・・・我々は重要なポストをたくさん握ったわけではない。たいした人数ではないにも拘わらず、大挙して昇進と報道されてきた」と述べている⁽¹³⁾。これらの発言は事実在即していたといえる。

タックシン政権時代の軍人事異動で異例といえるのは、陸軍総司令官を定年まで1年残して最高司令官に棚上げしたことであろう。過去に先例がないわけではないものの、スラユット、ソムタット、チャイヤシットと3名連続は史上初であった。このうちチャイヤシットはタックシンの従兄弟である。チャイヤシットは陸士16期生の工兵将校であり、工兵出身者が兵站部や実戦部隊の要職を経験することなく陸軍総司令官に就任した前例はなかった。総司令官に抜擢されたのはひとえに首相の力添えのおかげである。この意味でチャイヤシットの人事は依怙鬣屑の好例であった⁽¹⁴⁾。それは同時に、陸軍総司令官など誰にでも務まる、誰が務めても大差がないという軽視の反映といえるかもしれない。国家予算総額が年々増える中、国防費は金額を据え置いて実質的に削減していたことと軌を一にしている。

表3-1 陸軍首脳人事異動、2000年～2004年

| | 2000/10/1 | 2001/10/1 | 2002/10/1 | 2003/10/1 | 2004/10/1 |
|-----------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|
| 総司令官 | スラユット(12) | スラユット(12) | ソムタット(14) | チャイヤシット(16) | プラウイット(17) |
| 副総司令官 | パッタナ(11) | ニボン(14) | ワッタナチャイ(12) | シリチャイ(15) | チャラック(14) |
| 参謀長 | ブンロー(12) | ソムタット(14) | ウィーラチャイ(14) | ポンテープ(15) | ポンテープ(15) |
| 総司令官補佐 | サナ(14) | サナ(14) | チャイヤシット(16) | チャラック(14) | ルートルアット(18) |
| 総司令官補佐 | レーワット(13) | ワッタナチャイ(12) | シリチャイ(15) | プラウイット(17) | ソムテイ(17) |
| 副参謀長 | カニット(12) | シリチャイ(15) | タクーン(13) | パムボン(18) | パムボン(18) |
| 副参謀長 | ブリー(13) | ポンテープ(15) | ルートルアット(18) | アムナート(14) | ポンサック(18) |
| 参謀長補佐(情報) | ロンナチャック(14) | ルートルアット(18) | パムボン(18) | ワイボット(19) | ワイボット(19) |
| 参謀長補佐(作戦) | ポンテープ(15) | プラウイット(17) | ワイブーン(15) | ワイブーン(15) | キッテイボット(19) |
| 参謀長補佐(兵力) | タクーン(13) | タクーン(13) | パイロート(16) | パイロート(16) | スパーンシット(17) |
| 参謀長補佐(民活) | ウオーラボン(12) | ウオーラボン(12) | ブリーチャヤ(16) | チョンサック(20) | チョンサック(20) |
| 参謀長補佐(補兵) | シリチャイ(15) | アムナート(14) | アムナート(14) | ソーボン(17) | ソーボン(17) |
| 第1管区司令官 | ソムタット14 | ポーンチャイ(14) | プラウイット(17) | パイサーン(18) | パイサーン(18) |
| 第2管区司令官 | サナン(14) | チャラック・P(14) | チャラック・P(14) | チュムセーン(16) | フーン(17) |
| 第3管区司令官 | ワッタナチャイ(12) | ウドムチャイ(13) | ウドムチャイ(13) | ウドムチャイ(13) | ピチャーンメート(16) |
| 第4管区司令官 | ナロン(12) | ウィチャイ(14) | ウィチャイ(14) | ボンサック(18) | ピサーン(20) |
| 特殊戦争部隊司令官 | ターリン13 | ターリン13 | ソムテイ(17) | ソムテイ(17) | パムック(17) |
| 防空部隊司令官 | トンチャイ(13) | トンチャイ・P(13) | アーンテイット(15) | アーンテイット(15) | タヌー(16) |
| 第1旅団司令官 | ポーンチャイ(14) | アーンチャウイン(15) | ユッタサック(17) | ウドム(18) | ウドム(18) |
| 第2旅団司令官 | キットクーン(14) | キットクーン(14) | タヌー(16) | タヌー(16) | カセーム・K(16) |
| 第3旅団司令官 | ウドムチャイ(13) | ソムブーンキアト(14) | ソムブーンキアト(14) | ソムブーンキアト(14) | サブラン(18) |
| 第1師団長 | パイサーン(18) | パイサーン(18) | チャシット・K(21) | アズボン(21) | プリン(21) |
| 第2歩兵師団長 | ウドム(18) | ウドム(18) | アズボン(21) | プラユット(23) | プラユット(23) |
| 第3歩兵師団長 | マーナ(18) | マーナ(18) | マーナ(18) | マナー(18) | ソムキアト(20) |
| 第3歩兵師団長 | フーン(17) | フーン(17) | スチット(19) | スチット(19) | ウィーワリット(21) |
| 第6歩兵師団長 | ウィワット(15) | ウィブーンサック(20) | ウィブーンサック(20) | ウィブーンサック(20) | ピチェート(22) |
| 第4歩兵師団長 | トーマーン(17) | トーマーン(17) | ステーブ(19) | タワツチャイ(19) | タワツチャイ(19) |
| 第1騎兵師団長 | ソムブーンキアト(14) | ナコーン(17) | ナコーン(17) | ナコーン(17) | ナコーン(17) |
| 第5歩兵師団長 | ボンサック(18) | ボンサック(18) | ウィロート(20) | ウィロート(20) | チャルムチャイ(21) |
| 対空砲師団長 | ニボン・T(16) | ニボン・T(16) | ルーリット(20) | ルーリット(20) | ルアンサック(21) |
| 砲兵師団長 | チャートリー(16) | チャートリー(16) | ウィブーン(18) | ウィブーン(18) | ウィブーン(18) |
| 第2騎兵師団長 | チャルムボン(15) | サハチャイ(16) | サハチャイ(16) | サーニット(21) | サーニット(21) |
| 第1特殊戦争師団長 | ソムテイ(17) | ソムテイ(17) | バントーン(19) | バントーン(19) | ポーコット(23) |

表3-2 陸軍首脳人事異動、2005年～2009年

| | 2005/10/1 | 2006/10/1 | 2007/10/1 | 2008/10/1 | 2009/10/1 |
|-----------|--------------|--------------|---------------|---------------|--------------|
| 総司令官 | ソントイ(17) | ソントイ(17) | アスボン(21) | アスボン(21) | アスボン(21) |
| 副総司令官 | ウィット(20) | バイサーン(18) | ウィラウット(18) | チラデート(20) | プラユット(23) |
| 参謀長 | ソープン(17) | モントリー・S(20) | モントリー・C(17) | プラユット(23) | ピルン(21) |
| 総司令官補佐 | バイサーン(18) | アスボン(21) | ティラフット(21) | ティラフット(21) | ティラフット(21) |
| 総司令官補佐 | ポーンチャイ(21) | サプラン(18) | チラデート(20) | ウイロート(20) | ウィット(22) |
| 副参謀長 | キッテイポーン(19) | キッテイポーン(19) | マーライ(23) | マーライ(23) | マーノート(21) |
| 副参謀長 | チオンサック(20) | チャトラチャイ(21) | ボーデーイン(18) | ピルン(21) | ダーボン(23) |
| 参謀長補佐(情報) | チャトラチャイ(21) | カセム・Y(22) | シリチャイ・D(24) | シリチャイ・D(24) | シリチャイ・D(24) |
| 参謀長補佐(作戦) | チャートチャイ(20) | チャートチャイ(20) | カーン(20) | ダーボン(23) | アクサラ(25) |
| 参謀長補佐(兵力) | モントリー・C(17) | モントリー・C(17) | アルン(25) | アルン(25) | アルン(25) |
| 参謀長補佐(民活) | チャリヤ(19) | チャリヤ(19) | マーノート(21) | マーノート(21) | スラサック(23) |
| 参謀長補佐(補兵) | キッテイマート(16) | サンテイ(17) | チャトラチャイ(22) | ブンサーン・M(21) | ターニン(21) |
| 第1管区司令官 | アスボン(21) | プラユット(23) | プラユット(23) | カニット(24) | カニット(24) |
| 第2管区司令官 | スチエート(18) | スチエート(18) | スチット(19) | ウイブーンサック(19) | ウイフリット(21) |
| 第3管区司令官 | サプラン(18) | チラデート(20) | サムルーン(20) | タノンサック(22) | タノンサック(22) |
| 第4管区司令官 | クワンチャート(19) | ウイロート(20) | ウイロート(20) | ピチエート(22) | ピチエート(22) |
| 特殊戦争部隊司令官 | ハムツク(17) | チャイハット(19) | スナイ(22) | プチョン(21) | ポーコット(23) |
| 防空部隊司令官 | ウオーラデート(17) | ウオーラデート(17) | チッテイポーン(19) | ユッタシン(21) | ユッタシン(21) |
| 第1旅団司令官 | チラジット・K(21) | ウィット(22) | ドゥンラクリット(21) | ドゥンラクリット(21) | チラデート(24) |
| 第2旅団司令官 | ウイブーンサック(19) | ウイブーンサック(19) | ウイブーンサック(19) | ソーボン・D(21) | タワツチャイ(23) |
| 第3旅団司令官 | タワツチャイ(19) | サンコム(19) | タノンサック(22) | ワンナティップ(23) | ワンナティップ(23) |
| 第1師団長 | プリン(21) | ダーボン(23) | パイブーン・K(26) | パイブーン・K(26) | カムパナート(27) |
| 第2歩兵師団長 | カニット(24) | カニット(24) | カニット(24) | フリット(26) | フリット(26) |
| 第9歩兵師団長 | アドゥン(22) | アドゥン(22) | デンチャイ(23) | ウドムデート(25) | ウテイット(25) |
| 第3歩兵師団長 | ウイフリット(21) | ウイフリット(21) | チャーンチャイ(25) | チャーンチャイ(25) | チャーンチャイ(25) |
| 第6歩兵師団長 | ピチエート(22) | タワツチャイ(23) | カノック(22) | カノック(22) | チャフリット・C(26) |
| 第4歩兵師団長 | タノンサック(22) | チャイハロン(24) | スラチエート・C(25) | ソントイサック(25) | ソントイサック(25) |
| 第1騎兵師団長 | パイラット(22) | ワンナティップ(23) | チャオフリット・S(23) | チャオフリット・S(23) | プラーカーン(26) |
| 第5歩兵師団長 | カシコーン(22) | デンチャイ(23) | デート(24) | デート(24) | スハット(24) |
| 対空砲師団長 | ルアンサック(21) | ヨートユットン(23) | ヨートユットン(23) | アムボン(23) | アムボン(23) |
| 砲兵師団長 | プラユット・M(21) | プラユット・M(21) | プラユット・M(21) | プラユット・M(21) | スキット(23) |
| 第2騎兵師団長 | サーニット(21) | ウイラート(23) | ウイラート(23) | ウイラート(23) | スラサック・B(25) |
| 第1特殊戦争師団長 | マーライ(23) | マーライ(23) | スツパウット(25) | スツパウット(25) | チャルム(24) |

2.3 クーデタをめぐる人事異動

タックシンのように、総選挙で勝利をおさめる見込みが大きな政治家が、内外から批判を招くクーデタによって権力奪取を企む可能性は著しく低い。もしクーデタを企むものがあるとするれば、選挙ではタックシンを打ち負かせない勢力であろう。そうした勢力が存在したからこそ、タックシンは軍隊の人事異動に当たって、親族や同期生への振る舞いばかりではなく、クーデタの阻止に注意を払っていた。

現国王の権威が顕著に高まった1970年代以後のタイでは、クーデタの成否にとって決定的に重要なのは国王の裁可となった。権力奪取は、国王が裁可すれば、違法ではなくなり、成功したことになる。裁可が得られなければクーデタは失敗に終わる。ただし、国王が裁可を公然と拒んだこと、あるいはクーデタ軍の鎮圧を陣頭指揮したことはない。国王の判断を仰いだり手を煩わせたりする前に、決着はついてきた。クーデタの支持派が軍隊内部において多数派なのか少数派なのか、それが勝敗の分かれ目である。もう少し正確に表現すれば、大事なのは、クーデタの実行場所である首都においていざ決戦になったときに、どちらが勝利をおさめる可能性が高いかという予測である。実行派の優位が動かなければ、裁可を得られる可能性はきわめて高い⁽¹⁵⁾。1991年クーデタがそうであったように、決行派が軍隊内部で確たる多数派を形成していれば、国王は裁可を拒みがたい。この意味で、多数派工作は国王の裁可以上に重要である。

クーデタに参加するのは首都もしくは近郊の部隊である。首都の部隊が参加しなければ、あるいは鎮圧側に回れば、クーデタの成功は難しい。成功の可能性が乏しければ、実行意欲を阻喪させる。首都には第1管区司令部のほか、第1師団、第2騎兵師団、対空砲師団の3つの師団司令部がおかれている。首都の3つの師団をおさえれば、クーデタを抑止するはずであった。タックシンは2004年10月の人事異動で首都の3つの師団を同期生に委ねた。陸軍に加えて、タックシンの同期生は空軍地上部隊ならびに海軍の海兵隊の司令官も握った。この布陣は、タックシン政権を武力で打倒しようとする勢力の前に大きく立ちはだかった。

タックシンは、周知のように、選挙で非常に強かった。彼の政党は2001年以後の総選挙で4回連続して第一党になった。タックシン派政権を倒そうとすれば、失策を重ねて人気を失うのを待つしかなかった。それがいつ到来するのか、06年の時点では予測困難であった。早々に倒そうとすれば、選挙以外の方法を用いるしかなかった。軍事クーデタが企まれる理由はここにあった。しかも、タックシン政権を倒そうとすれば急ぐ必要があった。タックシンの同期生は60歳の定年を迎えるまでは重要なポストに就任するものが年々増えていく。陸軍のみならず、海軍や空軍の総司令官も予科10期生の就任が間近に迫っていた。06年時点でいえば、その後約5年間は、クーデタの決行は遅れるほど成功の可能性が低く

なる。しかも、タックシン支持者が主張するように、反タックシン派の黒幕が高齢であるとすれば、決行を急がなければならない。それは06年9月19日に決行された。

タックシンはこのクーデタを阻止できなかった。なぜであろうか。師団長が裏切ったからではなかった。佐官の人事権を持つ陸軍総司令官が06年7月に第1管区司令官に全権を委ねて大隊長の人事異動を断行させ、部隊が師団長ではなく、総司令官の命令に従う態勢を整えたからであった。これはプルーム枢密院議長が軍隊を競走馬に喩えて、騎手である政府よりも馬主である国王⁽¹⁶⁾の言うことを聞かねばならないと軍隊に訓話を述べた直後のことであった。マス・メディアは「クーデタ阻止のための人事異動」と報道し⁽¹⁷⁾、国立大学院大学NIDAの学長を務める政治学者は「国民は安心してよい。クーデタはもう生じない。プルーム派の軍人は民主主義体制の維持を願っているからだ」と論評した。タックシン派の無力化という点は正しいものの、上述のようにタックシン派によるクーデタの可能性はそもそもきわめて低く、むしろ正反対の結果をもたらすための人事異動であった。7月に大隊長が交代した第1師団の5個大隊はクーデタでは「主力部隊となり、成否を決した⁽¹⁸⁾。」

この人事異動が可能になった一因は、陸士21期生の内部に亀裂が生じていたからである。タックシン政権が続く限り、近い将来陸士21期生が陸軍総司令官に就任するのは確実であった。誰が就任するのか。21期生で最初に師団長になったのは、第1師団のチラシットと第2歩兵師団のアヌボンである。02年10月のことであった。この時点ではチラシットが一步リードしていた。03年10月にはチラシットは第1管区副司令官に昇進し、アヌボンが後任の第1師団長になった。04年10月にはアヌボンも第1管区副司令官に昇進した。05年10月には両者は逆転する。チラシットが第1旅団長に就任したのに対して、アヌボンは第1管区司令官に昇進した。第2歩兵師団長経験者としては初めて陸軍総司令官に就任したプラウィットの助力があったことは想像に難くない。しかし、その05年10月には別の21期生ポンチャイが総司令官補佐に抜擢されて、同期の出世頭になった(表3参照)。遅くとも当時の総司令官ソンティが定年を迎える07年10月には総司令官就任が確実視された。ポンチャイは陸軍では非主流派の開発部隊(工兵)出身である。彼は定年がアヌボンよりも1年遅いため、アヌボンの総司令官就任の可能性は乏しくなる。アヌボンは、タックシンに忠実な同期生との間に少し距離をおくようになり、06年7月の大隊長人事異動に第1管区司令官として荷担していた。

それどころか、2006年9月19日クーデタでは、首謀者のソンティ陸軍総司令官は9月16日から7名で謀議をめぐらすようになり、実行計画は第1管区司令官のアヌボンと2人だけで練っていた。ロップブリー駐屯の特殊戦争部隊出身のソンティと異なり、アヌボンは出身部隊が第2歩兵師団であり、第1師団長を経験した後、第1管区司令官に就任してお

り、首都と近辺の部隊に信頼しうる部下を多数擁していたからである。7名の謀議者はこの両者のほか、ソンティが信頼する特殊戦争部隊の佐官3名、第1管区副司令官プラユット、そして7月に第1歩兵連隊第1大隊長に抜擢されたアヌポンの副官であった⁽¹⁹⁾。興味深いことに、特殊戦争部隊出身4名、第2歩兵師団出身3名という構成であった。週刊ネーションによると、第2歩兵師団は9月16日夜に連隊長と大隊長を集めて会議を開いており、決行当日の19日には師団が全軍をあげて参加していた⁽²⁰⁾。

クーデタの主力部隊はアヌボンが率いる第1管区の陸軍であった。アヌボンは決起の数日前に実行部隊の指揮官たちに向かって「国王陛下は今日の国情に大いに苦しんでおられる。我々は国王警護兵として陛下のために何ができるだろうか。喋るだけ、眺めるだけであって、何もしなくてよいのか。・・・我々は国王陛下の兵士である」と檄を飛ばした⁽²¹⁾。クーデタのどこが国王のためになるのかは定かではないものの、7月に着任したばかりの第4騎兵大隊長はクーデタ直後に「我々は国王陛下に求められれば何でもできる。我々兵士は国王陛下のものだ」と語っており⁽²²⁾、「国王のため」という訴えが有効であったことがわかる⁽²³⁾。クーデタに参加したのは43個の大隊であり、連隊長には100万バーツ、大隊長には50万バーツの報酬が提供され、19日夜の当初から出撃した22個の大隊では金額が少し上乘せされていた⁽²⁴⁾。8個の連隊が参加し、「タイ史上最大規模の動員」とチャイアナンが説明した⁽²⁵⁾1981年4月クーデタにひけをとらない規模である。「成功したクーデタで戦車が首都市中を駆けめぐったのは1957年以来49年ぶりのことであった。それ以後は、戦車を用いたクーデタは失敗していた。成功したクーデタはもっと優雅で控えめであった。これは非常に原始的なクーデタであった。それには理由があった⁽²⁶⁾。」成功するクーデタでは、動員される部隊の規模は小さい。戦闘を行うわけではないので多数は不要である。動員すれば費用がかかる。しかし、反対勢力が存在する場合には、相手の抵抗意欲を削ぐために大規模な動員が必要になる。06年の場合には抵抗勢力の存在が動員規模を大きくしていた。動員は政府官邸や放送局の奪取だけのためではなかった。首都駐屯の3個師団つまり第1師団には第2歩兵師団第2歩兵連隊、第2騎兵師団には第1師団第11歩兵連隊、対空砲師団には陸軍防空部隊と第4騎兵大隊、空軍には第1師団第31歩兵連隊を封じ込めのために展開した⁽²⁷⁾。成功を決したのは、CDRが当日深夜に国王夫妻に謁見し、取り付けた裁可であった⁽²⁸⁾。これによって、抵抗しようとする勢力は逆賊になった⁽²⁹⁾。

3. クーデタ後の人事異動

3.1 タックシン派の粛清

2006年クーデタ後、タックシン支持派と目される将校は厳しく粛清された。06年10月1

日付けの定期人事異動名簿が発表されたのは年度末間際の9月29日のことであった。陸士21期生は総司令官補佐のポーンチャイ、首都駐屯の3師団の司令官、第1旅団長も更迭された。2007年4月の異動では、21期生はさらに閑職に追いやられ、主要なポストに残るのは総司令官補佐のアヌボンと砲兵師団長だけであった。海軍や空軍でも、予科10期生を中心として、タックシン支持派は粛清された。

クーデタの指導者ソンティは陸士17期生であり、クーデタ実行時には海軍と空軍の総司令官ならびに警察長官も同期生であった⁽³⁰⁾。クーデタ後の人事異動で国防次官にも同期生を任命した。ただし、彼らの定年は間近に迫っていた。陸軍と海軍の総司令官は07年に、空軍も08年には定年を迎える。軍人事をめぐると最大の関心事は、ソンティの後継者であった。アヌボンは、タックシンと同期生ながら、クーデタで決定的に重要な役割を果たしていたため、順当に陸軍総司令官に就任することになる。しかし、ソンティは、アヌボンが定年まで3年を残していることを斟酌し、20期生モントリー参謀長に総司令官を1年間務めさせようとしたため、アヌボンとの関係がぎくしゃくとした⁽³¹⁾。その後さらに08年10月にはアヌボン1人を残して、海軍と空軍の総司令官、国軍最高司令官、国防次官がそろって定年退職したため、軍首脳が大幅に交代した。最高司令官と海軍総司令官には予科10期生が就任した。軍首脳部において就任時期の早いアヌボンは地位が一段と高まった。

アヌボン時代の陸軍人事異動において印象的なのは、後述のような第2歩兵師団人脈とともに、陸士21期生の復権である。2008年10月には総司令官補佐1名、副参謀長1名、参謀長補佐2名、管区司令官2名、旅団司令官2名に同期生がいた(表3参照)。一度は首脳部からほぼ放逐された陸士21期生が再登場したことには2つの理由があろう。1つはタックシン派のサマック政権下で人事異動が行われたことである。軍人事異動をめぐるとタックシンからの指示をサマック首相が無視したとワーサナーは記している⁽³²⁾。確かに、06年クーデタで更迭された将校、すなわちタックシンにもっとも近い将校は、要職には戻れなかった。しかし、サマック政権が発足し首相が国防大臣を兼任すると、第1師団長や空軍地上部隊司令官といった熱烈なタックシン支持派とみられていた将校は、国防大臣付参謀に任命された。彼らは閑職から、軍全体を見渡せるポストに転じたのであり、08年4月や10月の定期人事異動では一定の影響力を行使したものと想像される。もう1つはアヌボンの事情であろう。第2歩兵師団のみを支持基盤とすることは、アヌボンの足場を脆くする。唯一の支持基盤となる後輩に対して脆弱になるからである。そこで、総司令官就任後は同期生を重要な地位に抜擢するようになったという面もあるはずである。タックシン派政権崩壊後の09年10月の人事異動でも陸士21期生が要職にとどまっているのはその証拠といえよう。

3.2 「東部の虎(burapha phayak)」

クーデタに関連して、すなわちクーデタ前の佐官人事異動、クーデタへの参加、その後の人事異動を通じて、陸軍首脳部には注目すべき変化が生じた。陸軍のエリートコースが首都駐屯の第1師団から、東部ブラーチーンブリー駐屯の第2歩兵師団へと変化したのである。それがどういうことなのかを見てみよう。

陸軍首脳部への最短距離にいるのは第1管区司令官である。第1管区には第1、2、9の3つの師団がある。3つの師団には格の違いがある。第2、9歩兵師団長から第1師団長に転任することはある。1980年代には2名が第9から第1へ、90年代には3名が第2から第1へ転任している。現在の陸軍総司令官アヌボンも第2歩兵師団長の後、第1師団長に転任し、管区司令官になった。しかし、その逆、つまり第1師団長から、第2、9歩兵師団長への転任は例がない。第1師団は格が上なのである。これは第1管区の3師団のうち第1師団が歴史的にも軍事的にも政治的にももっとも重要な部隊となっていることに由来している。陸軍士官学校を卒業したもののうちもっとも優秀なものたちが第1師団の部隊へと配属される⁽³³⁾。それは第1、11、31の3つの歩兵連隊である。とりわけ首都中心部の第1歩兵連隊、首都郊外の第11歩兵連隊は重要である。それに対して、第2歩兵師団には第2、12、21の3歩兵連隊、第9歩兵師団には第9、19、29の3歩兵連隊が所属している。第1師団と第2歩兵師団の連隊はいずれも近衛連隊であり、とくに第1師団第1歩兵連隊は国王の警護、第2歩兵師団第21歩兵連隊は王妃の警護を担当する特殊な近衛連隊である。

1990年代以後の第1管区司令官15名中第2歩兵師団長経験者は7名であり、そのうち3名は第1師団長も経験している。第1師団長を経験していないのは、ニボン(14期生)、ブラウイット(17期生)、プラユット(23期生)、カニット(24期生)の4名である。ニボンは第21歩兵連隊長(1985-89年)を経て第2歩兵師団長(1992-95年)を務め、97年に第1管区司令官に就任した。第21歩兵連隊長経験者としては初の第1管区司令官である。その後98年に陸軍総司令官補佐、01年に陸軍副総司令官に昇進して翌年定年退職した。ブラウイットは第12歩兵連隊長(1989-93年)を経て第2歩兵師団長(1996-97年)になり、97年10月第1管区副司令官、98年10月第1旅団司令官と昇進した。ところが2000年10月に閑職に左遷され、01年10月に陸軍参謀長補佐という日の当たる場所へ戻った。ブラウイットは02年10月には第1管区司令官に転任し、03年には陸軍総司令官補佐、そして定年1年前の04年10月には陸軍総司令官に就任した。第2歩兵師団生え抜きの将校としては史上初の陸軍総司令官であることを特筆すべきであろう。

アヌボンは、ニボンと同様に第21歩兵連隊長(1996-98年)を務めた後、02年10月第2歩兵師団長、03年10月第1師団長、04年10月第1管区副司令官、05年10月第1管区司令官と

駆け足で昇進した。アヌボン以後の第1管区司令官は第2歩兵師団出身者が続く。プラユットはアヌボンの後を追うように昇進した。彼はアヌボンの後任として第21歩兵連隊長(1998-02年)、第2歩兵師団長(2003-05年)を経て、05年10月第1管区副司令官、クーデタ直後の06年10月第1管区司令官、08年10月陸軍参謀長と昇進した。カニットは第12歩兵連隊長(2002-04年)を経て、プラユットの後任の第2歩兵師団長(2005-08年)となり、08年4月に第1管区副司令官、半年後の08年10月には第1管区司令官に就任した。第2歩兵師団人脈の台頭は奔流のごときである。この人脈は陸軍のみならず、政治の世界でも重要な役割を果たすようになる。そのとりまとめ役のプラウィットは、在職中にはアヌボンの昇進を助け、退職後は王妃発案の森林保護活動に携わり、06年クーデタに一役買った⁽³⁴⁾。プラウィットは08年12月発足の民主党政権で国防大臣に就任した。国防大臣、陸軍の総司令官、参謀長、第1管区司令官というタイ軍の軸上のポストがすべて第2歩兵師団長経験者ということになった。09年10月にはプラユット参謀長が翌年のアヌボン退役に備えて副総司令官に昇任した。第21歩兵連隊は王妃の警護担当の近衛連隊ゆえに「王妃の虎将(thahan sua rachini)」と呼ばれ、その第21歩兵連隊に重心がある第2歩兵師団人脈は「東部の虎(burapha phayak)」と呼ばれる。第2歩兵師団人脈の台頭の政治的含意については後述することになる。

さらにもう1つの興味深い事実を指摘すべきであろう。第2歩兵師団長就任から第1管区司令官昇進までの年数を見ると、ニポンは5年、プラウィットは6年であったのに対して、アヌボン以後は3年になった。アヌボン、プラユット、カニットの3名について、第2歩兵師団長離任から第1管区司令官就任までの年数を調べると、アヌボンの2年に対して、プラユットは1年、カニットは半年と着実に短くなっている。タイの陸軍の歴史を振り返ると、第1師団の生え抜きで、第1師団長→第1管区司令官→5虎将→総司令官というのが本道であった。頂点にいたるための特急コースであったと言い換えてよい。近年の総司令官ではソムタットが典型例である。ところが、第2歩兵師団が超特急コースとして浮上してきた⁽³⁵⁾。

しかも、第2歩兵師団主導體制は佐官の人事異動によって基礎を一段と固めつつある。その中でもとくに重要なのは連隊長級の大佐、大隊長級の中佐の人事異動である。大佐の異動は将官の定期異動が行われる10月と4月の直後、中佐の異動はさらにその後に実施されることが多い。人事異動名簿が官報で公表される将官と異なり、佐官の異動は新聞報道に頼るしかない。その情報は断片的であり、異動を網羅していない。各紙の論評が画一的になりがちなので、軍の広報情報を転載しているにすぎない可能性が高い。この限界を承知の上で、佐官人事異動について考察してみよう。そうした佐官の人事異動に、アヌボンは近年の陸軍総司令官としては異例な頻度で関与している。これは佐官の人事権を持つ総

表 4 第 2 歩兵師団長経験者の陸軍首脳、2000 年 10 月～2009 年 10 月

| | 2000/10/1 | 2001/10/1 | 2002/10/1 | 2003/10/1 | 2004/10/1 | 2005/10/1 | 2006/10/1 | 2007/10/1 | 2008/10/1 | 2009/10/1 |
|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|
| 総司令官 | | | | | ブラウイット(17) | | | アスボン(21) | アスボン(21) | アスボン(21) |
| 副総司令官 | | ニボン(14) | | | | | | | ブラウユット(23) | ブラウユット(23) |
| 参謀長 | | | | | | | アスボン(21) | | | |
| 総司令官補佐 | ニボン(14) | | | | | | | | | |
| 総司令官補佐 | | | | ブラウイット(17) | | | | | | |
| 副参謀長 | | | | | | | | | | |
| 副参謀長 | | | | | | | | | | |
| 参謀長補佐(情報) | | | | | | | | | | |
| 参謀長補佐(作戦) | | | | | ブラウイット(17) | | | | | |
| 参謀長補佐(兵力) | | | | | | | | | | |
| 参謀長補佐(民活) | | | | | | | | | | |
| 参謀長補佐(補兵) | | | | | | | | | | |
| 第1管区司令官 | | | | | ブラウイット(17) | | | アスボン(21) | ブラウユット(23) | ブラウユット(23) |
| 第2管区司令官 | | | | | | | | | | |
| 第3管区司令官 | | | | | | | | | | |
| 第4管区司令官 | | | | | | | | | | |
| 特殊戦争部隊司令官 | | | | | | | | | | |
| 防空部隊司令官 | | | | | | | | | | |
| 第1旅団司令官 | | | | | | | | | ウドム(18) | ウドム(18) |
| 第2旅団司令官 | | | | | | | | | | |
| 第3旅団司令官 | | | | | | | | | | |
| 第1師団長 | | | | | | | | | アスボン(21) | アスボン(21) |
| 第2歩兵師団長 | ウドム(18) | ウドム(18) | アスボン(21) | ブラウユット(23) | ブラウユット(23) | カニット(24) | カニット(24) | カニット(24) | カニット(24) | カニット(24) |
| 第9歩兵師団長 | | | | | | | | | フリット(26) | フリット(26) |

網掛けが第 2 歩兵師団長経験者。() の数字は陸士の期。

表5 アヌボンによる陸軍掌握過程

| 年月 | 05/07 | 05/10 | 06/07 | 06/10 | 07/04 | 07/10 | 07/11 | 08/04 | 08/05 | 08/10 | 09/02 | 09/06 | 09/11 |
|-----------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 人数 | 112 | 58 | 129 | 75 | 179 | 215 | 84 | 104 | 98 | 141 | 130 | 75 | 256 |
| 第1師団 | | | | ✓ | | | | | | | | | ✓ |
| 第4騎兵大隊 | ✓ | | ✓ | | | | ✓ | | | | | ✓ | |
| 第1歩兵連隊 | | | | ✓ | | | | | | ✓ | | | |
| 第1大隊 | | | ✓ | | | | | | | | ✓ | | |
| 第2大隊 | | | | | | | | | ✓ | | | | |
| 第3大隊 | ✓ | | ✓ | | | | | | | | ✓ | | |
| 第4大隊 | | | | | | | ✓ | | | | | | |
| 第11歩兵連隊 | | | | | | ✓ | | | | | | | |
| 第1大隊 | | | | | | | ✓ | | | | | | |
| 第2大隊 | | | ✓ | | | | | | | | ✓ | | |
| 第3大隊 | ✓ | | ✓ | | | | | | | | ✓ | | |
| 第31歩兵連隊 | | | | ✓ | | | | | | | ✓ | | ✓ |
| 第1大隊 | | | | | | | | | | | ✓ | | |
| 第2大隊 | | | | | | | | | | | | | |
| 第3大隊 | | | | | | | | | | | | | |
| 第2歩兵師団 | | | | | | | | ✓ | | | | | |
| 第2歩兵連隊 | | ✓ | | | | | | | | | | | |
| 第1大隊 | | | | | | | | | | | | | |
| 第2大隊 | ✓ | | | | | | | | | | ✓ | | |
| 第3大隊 | | | | | | | | | | | | | |
| 第12歩兵連隊 | | | | ✓ | | | | | | | | | |
| 第1大隊 | ✓ | | | | | | | | | | | | |
| 第2大隊 | ✓ | | | | | | | | ✓ | | | | |
| 第3大隊 | ✓ | | | | | | | | ✓ | | | | |
| 第21歩兵連隊 | | | | | | | | | | | | | ✓ |
| 第1大隊 | | | | | | | ✓ | | | | | | |
| 第2大隊 | | | | | | | ✓ | | | | | | |
| 第3大隊 | | | | | | | | | | | ✓ | | |
| 第9歩兵師団 | | | | | | ✓ | | | | | | | ✓ |
| 第9歩兵連隊 | | | | | | | | | | ✓ | | | |
| 第1大隊 | | | | | | | | | | | | ✓ | |
| 第2大隊 | | | | | | | | | | | | | |
| 第3大隊 | ✓ | | | | | | | | | | ✓ | | |
| 第19歩兵連隊 | | ✓ | | | | | | ✓ | | | | | |
| 第1大隊 | | | | | | | | | ✓ | | | | |
| 第2大隊 | ✓ | | | | | | | | ✓ | | | | |
| 第3大隊 | | | | | | | | | | | | | |
| 第29歩兵連隊 | | | | ✓ | | | | | | ✓ | | | ✓ |
| 第1大隊 | | | | | | | | | | | | | |
| 第2大隊 | | | | | | | ✓ | | | | | | |
| 第3大隊 | | | | | | | | | | | | | |
| 対空砲師団 | | | | ✓ | | | | | | ✓ | | | |
| 第1対空砲連隊 | | | | ✓ | | | | | | ✓ | | | |
| 第1大隊 | | | | | | | | | | | | | |
| 第2大隊 | | | | | | | ✓ | | | | | | |
| 第4大隊 | | | | | | | | | | | | | |
| 第7大隊 | | | | | | | | | | | ✓ | | |
| 第2対空砲連隊 | | | | | ✓ | | | | | ✓ | | | |
| 第3大隊 | | | | | | | | | | | | | |
| 第5大隊 | | | | | | | ✓ | | | | | | |
| 第6大隊 | | | | | | | | | | | | | |
| 第2騎兵師団 | | | | ✓ | | | | | | | | | ✓ |
| 第1騎兵連隊 | | | | ✓ | | | | | | ✓ | | | |
| 第1騎兵大隊 | | | | | | | | | | | ✓ | | |
| 第3騎兵大隊 | | | | | | | | | | | ✓ | | |
| 第17騎兵大隊 | | | | | | | | | | | | | |
| 第4騎兵連隊 | | | | ✓ | | | | | | | | | ✓ |
| 第5騎兵大隊 | | | | | | | | | | | | | |
| 第11騎兵大隊 | | | | | | | | | | | ✓ | | |
| 第25騎兵大隊 | | | | | | | | | | | | | |
| 第5騎兵連隊 | | | | ✓ | | | | | | | | | |
| 第20騎兵大隊 | | | | | | | | | | | | | |
| 第23騎兵大隊 | | | | | | | | | | | | | |
| 第24騎兵大隊 | | | | | | | | | | | | | |
| 第1特殊戦争師団 | | | | | ✓ | | | | | | ✓ | | ✓ |
| 第1特殊戦争連隊 | | | | | ✓ | | | ✓ | | | | | |
| 第3特殊戦争連隊 | | | | | | | | ✓ | | | | | |

注

✓は人事異動があったことを示す。

網掛けはアヌボンの思惑が強く反映された異動であったことを示す。

司令官に就任する前から異動に関わり、さらに総司令官を3年間務めることになったからである。最初はクーデタに備えた2006年7月の佐官人事異動である。クーデタの指導者ソンティ総司令官は特殊戦争部隊の出身なので、歩兵や首都の部隊には人脈が乏しい。そこで、クーデタの成否を左右する首都の部隊の掌握作業は第1管区司令官のアヌボンに委ねられた。まずアヌボンにとっては出身部隊の第2歩兵師団は安全確実な支持基盤である。彼にとって重要なのは第1師団と第9歩兵師団である。アヌボンはクーデタの決行に踏み切れるよう、信頼しうる将校を第1師団の大隊長に送り込んだ。07年10月には総司令官に就任して佐官の人事権を掌握すると、ソンティ派の将校を更迭する一方、信頼しうる将校の抜擢を進めた。かつて師団長を務めた第1師団については、統制を確実なものにするために、07年10月に第11歩兵連隊長、08年10月に第1歩兵連隊長、09年11月には第31歩兵連隊長を信頼しうる将校に交代させた。大隊長についても、たとえば、08年5月に第1歩兵連隊長第2大隊長をプラウィットの陸軍総司令官時代の副官に交代させた。プラウィットの資金源とされる実業家の娘婿でもあった⁽³⁶⁾。クーデタにとってとりわけ重要な第4騎兵大隊の司令官については、クーデタ直前の06年7月に交代させていたほか、総司令官就任直後の07年11月にはアヌボンの側近を、09年6月にはプラウィット国防大臣の副官を任命した。相次ぐ腹心の任命は同大隊の重視、統制への関心の高さを反映している。他方、第9歩兵師団については、たとえば08年4月にはアヌボンの副官を第19歩兵連隊長に任命し、翌月には同連隊の2名の大隊長を交代させた。これによって第9歩兵師団の第19歩兵連隊を掌中に収めた。08年10月には残る2つの連隊の司令官も交代させて統制を強化した。こうした異動によって、第2歩兵師団とりわけ王妃の虎将を自任する将校たちによる第1管区支配は日々強まりつつあるように思われる。

4. もう1つのクーデタ：再民主化後の政治介入

2006年9月クーデタに始まる軍隊の政治介入は、07年12月23日の総選挙実施をもって終了するはずであった。確かに積極的な介入は影を潜めた。しかしながら、不作為あるいは政府への非協力といった形での政治介入は08年12月にタックシン派政権が崩壊するまで続く。民主党への政権交代後は、一転して、政権の護持に献身することになる。軍隊は何をしたのか、サマック政権、ソムチャーイ政権、アピシット政権の順に具体的に見てみよう。

4.1 サマック政権下(2008年2月～9月)

2008年2月の政権発足早々、サマック首相はクーデタの可能性があると何度も発言し

た。アヌボンが3月29日に記者会見を開き、「陸軍にはそんなこと [=クーデタ] を考えているものはいない」と断言した⁽³⁷⁾。アヌボンは翌日にも、クーデタをやらないと断言した⁽³⁸⁾。1ヶ月ほどして、4月25日の国防会議の後、アヌボンは記者会見に臨み、「クーデタが起きるといふ複数の噂が流布しているけれども、すべて事実無根だ。」「クーデタは起きない」と断言した⁽³⁹⁾。

連合(黄シャツ)は5月25日に、12月まで続くことになる首相府前での路上集会に突入した⁽⁴⁰⁾。連合の本格的な活動再開でクーデタの噂が飛び交った。5月28日の国防会議後の記者会見で、軍首脳が口々にクーデタの可能性を否定した⁽⁴¹⁾にも拘わらず、5月29日付けの英字紙バンコク・ポストは、興味深い報道をした。プラユット第1管区司令官は研修でヨーロッパに出かけていたところ、アヌボンから急遽帰国するように命令を受けた。プラユットの側近によると、「プラユット中将は、クーデタ決行を求める連合から接触を受けていたので、バンコクにとどまっているのが嫌で」ヨーロッパへ出かけた。「この時期には帰国したくない。連合が軍隊にクーデタを唆すような行為をするのではないかと恐れているからだ。」こうした軍人の言葉を引用した上で、ポストはこう記した。「軍隊は連合が流血を待ち望んでいると信じている⁽⁴²⁾。」緊迫するさなかの6月1日にアメリカの国防長官ゲイツがサマック首相を訪問した。訪タイ前に立ち寄ったシンガポールで、ゲイツは「アメリカは民主的に選挙で選ばれた政府を望んでいる」と記者に語っていた。アメリカ側の同行者によると、国防長官のメッセージは、「タイ軍にとっては重みがあるはず」であった⁽⁴³⁾。味方をしないアヌボン陸軍総司令官への批判を連合が強めると、アヌボンは7月10日に記者会見で、「クーデタかどうかは問わず、武力を行使させようというのは、何度も述べてきたように、社会全体にとっての打撃が大きく、利益とならない。政治問題の解決にはほかの方法を用いるべきだ」と語った⁽⁴⁴⁾。

連合は8月26日に首相府と国営テレビ局NBTを占拠し、複数の官庁を包囲した。放送局に押し入ったものは82名が警備担当の警察によって逮捕された。首相府占拠の指導者9名にも内乱罪の逮捕状が出た。しかし、警察も軍隊も動こうとしなかった。アヌボンは26日の朝、「クーデタは絶対にやらない。軍隊は対処に当たらない」と述べた。日刊マティチョンによると、連合の首相府占拠後、手荒な取締りで騒乱状態になれば、軍隊はクーデタに訴える構えをみせていた。このため、サマック首相は強制排除を命じることができなかった⁽⁴⁵⁾。手詰まり状態の中で、9月2日朝、サマック首相は首都に非常事態を宣言した。実施責任者はアヌボンである。これは1日深夜から2日未明にかけて民主戦線(赤シャツ)が連合と衝突し、死者1名負傷者40名を出すという事件が起きたためであった。

アヌボンは2日朝に軍首脳の会議を招集し、午後に記者会見を開いた。連合と政府のどちらを選ぶのかと問われて、アヌボンは「国民の味方をする。軍隊と警察は中間に位置し

ており、国民が暴力的に衝突するのを望まない」と答えた⁽⁴⁶⁾。与党議員は、中立を標榜して何もしない陸軍総司令官を批判した。非常事態を宣言しても、軍隊が動こうとしないため、政府は次の一手として、9月4日の緊急閣議で、非常事態打開本部設置と首相の権限強化を決定した。「部隊の移動を命じる権限を総司令官から首相に移すに等しい内容だった。それまでは国防大臣のサマックが部隊を動かそうとすれば、総司令官からの助言をまず取り付ける必要があった」⁽⁴⁷⁾。多くのものは、サマックが自ら軍隊に強制排除を命じるための準備ではないかと考えた⁽⁴⁸⁾。このため、クーデタの噂が飛び交い、緊張が高まった。5日の朝には国軍最高司令官は3軍の総司令官と2時間あまりにわたって会合を開き、終了後には「軍人はクーデタをやらないと断言する。厄介な問題がたくさん起き、誰も賛成しないからだ」と記者に語った⁽⁴⁹⁾。軍首脳の会合情報を得たサマックは、アヌボンと呼び出す一方⁽⁵⁰⁾、記者には首相への権限の集中は迅速な対処を可能にするための措置であり、その権限をすでにアヌボンに委任したと語った⁽⁵¹⁾。

4.2 ソムチャーイ政権下(2008年9月～12月)

非常事態宣言が軍隊の拒否で空振りに終わり、打開策が見えない中、9月9日に憲法裁判所がテレビの料理番組に出演して報酬をもらったのは利益相反禁止規定に抵触するという判決を下したため、サマック首相は失職した。後任の首相ソムチャーイが国会で施政方針演説を行う10月7日に事件が起きた。連合は演説を阻もうとして、6日夜から国会前の道路を封鎖した。警察は催涙弾を用いて議員の出入りを可能にした。朝の登院と午後の帰宅の際に負傷者が出た。その後18時には、国会に近接する首都警察司令部に5000名ほどの連合が押しかけ、警察と衝突した。その際にはデモ隊の女子学生に死者が出た⁽⁵²⁾。これは、クーデタを待望する勢力にとっては千載一遇の好機であった。10月から陸軍参謀長に昇進することになるプラユットが第1管区司令官在職中の9月に、懇意の枢密院議長秘書官を介して、連合に危害が加えられた場合には軍隊が出動するとプレームや連合幹部に伝えていたからである⁽⁵³⁾。しかし、アヌボンは出動を許さず、自身が10月9日に記者会見で、「問題解決の方法にならず、新たな問題を招く。その結末は国の破滅である」とクーデタを否定した。アヌボンは10月10日にはテレビ番組に出演し、「軍隊は現在圧力を受けている。周知のように、クーデタの決行を催促されている。」「今クーデタを決行しても、実行行使を止め、緊張を和らげるという応急措置にしかならず、割に合わない。軍人の立場はクーデタはやらないということで全員が固く一致している」と語った⁽⁵⁴⁾。

しかし、10月16日夕方に軍首脳が揃って出演したテレビ3チャンネルの討論番組で、アヌボンは、クーデタは「やらない」と明言する一方、政府は10月7日の取締りの責任を取るべきであると指摘し、自分が首相だったら「辞任する」と述べて、ソムチャーイに辞

任を促した⁽⁵⁵⁾。ソムチャーイ首相は連立政権幹部と対応を協議し、辞職をきっぱりと否定した⁽⁵⁶⁾。ソムチャーイがアヌボンの要求を一蹴したのは、アヌボンの発言が他の首脳との相談なしの単独行動だったことに一因がある⁽⁵⁷⁾。アヌボンが強硬姿勢を貫けないのは、(1)政府と軍隊の関係が修復された、(2)軍隊は2006年9月19日クーデタから苦い教訓を学んだ、(3)アヌボンは強硬姿勢を貫くと解任される懸念がある、(4)この時期にクーデタをすれば、人垣で戦車を阻止すると息巻く反クーデタ勢力が存在するため流血になりかねない、(5)クーデタは国際社会からの非難を招き、タイが国際的に孤立する、といった事情のせいであった⁽⁵⁸⁾。

アヌボンが首相辞任要求という大胆な行動に出た理由として重要なのは、その直前に起きた事件であろう。まず10月7日に、王妃は警察が取締りに催涙弾を使用したことへの憂慮を表明し、負傷したデモ隊が搬送された4つの病院に治療費として10万バーツずつを給付すると連絡した⁽⁵⁹⁾。王妃は翌日の10月8日は治療費の助成を80万バーツに増やし、対象に警察官も含めることにした⁽⁶⁰⁾。デモ隊を警察官よりも優先する気遣いが明確であった。王妃は10月9日には副秘書官長を遣わして、死亡した女子大生の霊前に花を捧げた⁽⁶¹⁾。10月13日に女子大生の火葬式に王妃が三女を伴って出席した。4名の枢密顧問官のほか、軍首脳(3軍の総司令官、国軍最高司令官、国防次官)が勢揃いし、野党の民主党党首らも参列していた。一介の民間人の葬式にこれほどそうそうたる顔ぶれが並ぶのは著しく異例なことである。しかも、王妃は、女性の父親に対して、「よい娘だった。チャートを助けた。王室の護持に寄与した」と讃え、「国王陛下も事情をご存知であり、見舞金は陛下が下されたものだ」と明かした⁽⁶²⁾。国民は、連合と王妃の間には特別な関係があることを知らされた。何より、アヌボンは式場で「ある種の信号を送られ⁽⁶³⁾」、慌てふためかざるをえなかった。

コーウィット内務大臣は11月20日に国会での質問に対する答弁の中で、「(首相府を占拠する連合の)群集にはコネがある。もし普通の群集であれば・・・違法は違法としてとうにケリがついているはずだ。・・・特権集団であり、政府は断固たる措置を講じられない」と述べた⁽⁶⁴⁾。大臣が王室に言及していなかったにもかかわらず、連合幹部のチャムローンは激しく反発して「コネのある群集とは何か、包み隠さず本当のことを話すべきだ。(さもないと)王室を傷つけることになる」とかみついた⁽⁶⁵⁾。この応酬に示されるように、多くのものは連合が王室と特別な関係にあるのではないかと思っていた。

連合は11月24日に国会を包囲して開会を阻止し、その後臨時首相府となっていたドーンムアン空港へ続々と集結した。さらに、25日にかけてはスワンナプーム空港を封鎖した。25日に、軍首脳は対応を協議した後、記者の質問に答えた。国防次官は、「連合は陸軍総司令官に正しくないことをさせようとして圧力をかけるのを止めるべきだ。そんなこと(=

クーデタ)をすれば、国は一層の困難に陥るからだ」と述べた⁽⁶⁶⁾。アヌボンもクーデタの可能性を否定した⁽⁶⁷⁾。カニット第1管区司令官は、「(クーデタを実行するかどうかは)陸軍総司令官の命令次第か」と問われると、「空を指さしながら、『軍隊に(命令を下すのは)陸軍総司令官1人ではない』と答え」⁽⁶⁸⁾、総司令官よりも上位に命令権者が存在する可能性を匂わせた。

アヌボンは、11月26日14時から陸軍司令部に官庁、経済界、大学などの代表者を招いて対応を協議した。アヌボンは夕方の記者会見で、「クーデタで解決できるならば決行する。しかし、決行しても解決にならない。対外関係や経済に大打撃となり、社会が分裂する。決行すれば、黄シャツが赤シャツに交代して同じことをやるだろう」と語り、政府に国会解散を要求した⁽⁶⁹⁾。クーデタの決行には連合に敵対する形も荷担する形もともにありうるにもかかわらず、赤シャツの反発を想定する点において、連合への同調を既定方針としていることが分かる。

アヌボン提案への反応は悪く、アヌボンを批判する声も渦巻いた。連合がスワンナプーム空港を占拠しようとしているとき、軍隊は空港管理者と空港所在地の県知事から支援要請を受けたにもかかわらず、何もせず、事態が收拾不能になるのを放置した⁽⁷⁰⁾。アヌボンは連合の強制排除を拒み、17個中隊を空港へ派遣せよとの命令を拒否し、アヌボンを実施責任者とする非常事態の宣言にも反対した。それどころか、アヌボンは憲兵と第2歩兵師団の兵士を占拠後の空港へ派遣し、連合の警護に当たらせていた⁽⁷¹⁾。ワーサナーによれば、政府が警察に命じて空港から連合を排除しようとする構えをみせる中、軍隊は2つの理由からクーデタへの備えを始めた。1つには、アヌボンが国王側近から何度も呼び出される中、国民に危害を加えさせてはならないと要人から命じられたとの情報が軍隊と連合の中で飛びかい、警察による連合排除を軍隊が阻止する必要がある。もう1つには、政府がアヌボン更迭を検討するようになった。そこで11月26日には、第1管区の28個大隊にクーデタ決行に備えた待機を命じた。この命令は、プラユット参謀長が状況報告のために要人を訪問した後に下された⁽⁷²⁾。

4.3 アピシット政権下(2008年12月～)

膠着状態の中、憲法裁判所が対応した。与党3党の解党裁判の審理を急遽打ち切り、12月2日に3党の解党を決定したのである。解党直後には、PPPの議員数は212名、民主党は165名であった⁽⁷³⁾。その差は47名であり、24名が転向すれば逆転する。30名を超える派閥がPPP議員の受け皿となった政党PTP(Phua Thai Party)への移籍を拒み、独自の政党を立ち上げ、首班指名では民主党を支持することを決めた。これは判決を先読みしたアヌボンが12月3日からPPP議員への激しい工作を行ったからであった。アヌボンは総司令

官就任後一度も訪問していないソンティ前総司令官を訪ねて、政治家との橋渡しを依頼した。不仲なソンティに頭を下げたのは、軍事クーデタを避けるには政権交代が不可欠だったからである⁽⁷⁴⁾。総選挙の実施では民主党が勝利する可能性はきわめて低かった。選挙を経ずに政権交代を実現するには連立を組み替える必要があった。この工作には、アヌボンのほか、プラユットやプラウィットも加わっていた。形を変えたクーデタである⁽⁷⁵⁾。

民主党政権樹立工作への深い関与は、不当な政治介入として批判を招いた。しかも、王室を引き合いに出したことが批判に油を注いだ。PTPの議員4名が12月12日に共同記者会見を開いた。「陸軍総司令官と仲間は、王室を口実として、民主党政権が王室の希望であると主張した。赤シャツが民主党政権に反対したらどうするのかと問われると、誰と戦っているのか教えてやると説明した。これは国民と王室を対立させる行為であり、容認できない。」「王室と戦っても勝ち目はないぞ」と脅したというのである⁽⁷⁶⁾。

アヌボンが批判を招くことを覚悟で、強引な政権交代工作に乗り出したのは、「政権交代をずっと働きかけ続けてきた大物からの要請を断りがたかった」からであり、「それに加えて、プラユットを次の陸軍総司令官につけるためには、尽力せざるをえなかった」からであるといわれる⁽⁷⁷⁾。クーデタを回避するには、是が非でも政権交代を実現するしかなかった。しかし、軍隊は自らが生みの親となった民主党政権を庇護する必要が生じた。そこで、タックシン支持派の民主戦線(赤シャツ)が政権批判運動を始めると、首相府内部に第1師団から3個中隊を派遣して民主戦線の侵入阻止に対する備えをした。さらに、連合と民主戦線の衝突に備えて、全国の3軍部隊に治安維持部隊の設置を命じた。ワーサナーによると、両者の衝突を阻止し、連合の安全を守るためであった⁽⁷⁸⁾。2009年3月下旬から4月中旬にかけて、民主戦線は民主党政権打倒を目指して動員を試みた。4月8日には10万人規模のデモを行ったほか、9日からはバンコク市内の道路封鎖を始めた。民主戦線はパッタヤーにも押しかけてASEANサミットを中止に追い込んだ。4月12日には非常事態宣言のために内務省を訪れたアピシット首相の車両を襲撃した。宣言を受けて4月13日に軍隊が取締りに出動し、威嚇発砲を繰り返しながら迅速にデモ隊を首相府周辺へ追い込んで包囲し、集会を解散に追い込んだ⁽⁷⁹⁾。

5. 第2歩兵師団色の陸軍

英字紙ネーションの記者プラウィットは2008年5月に連合が路上集会を始めた直後にこう記した。「驚くべきことに、タイの大方のメディアはクーデタを普通のことと受け止めて、将軍や政治家に何が起きますかと尋ねている。記者たちは、明日は雨が降るかどうか

かを知りたくて天気を尋ねているかのようである。実際には、クーデタは違法であり、民主主義の観点からは正当化できず、タイの民主主義、社会、経済に害悪を及ぼすのである。記者たちが、あたかもクーデタには反民主主義的などころがないかのように、慣れっことになっていることが、メディアに問われるべき最大の責任であろう。有罪判決を受けた強姦犯人に、罰を逃れられるならば、魅力的でか弱い女性を襲うかと尋ねると同じことなのだ。「連合はクーデタを正当化する状況を作り出すためにありとあらゆるカードを懸命に使おうとしているように見受けられる。そのカードの1つは、王室へのありもしない脅威を言い立てることである⁽⁸⁰⁾。」

しかし、アヌボンがクーデタの実行を拒否した。クーデタがもたらす打撃が大きいことを2006年以後に学習済みだったからである。第一に、国際社会から厳しい批判や反発を招く。「外国は [2006年クーデタ後の] 政権を承認しなかった。話し相手になろうとしなかった。いろんな援助をすべて打ち切った。今のタイは鎖国をして自力で生きていくことはできない。外国に依存しなければならない⁽⁸¹⁾。第二に、クーデタの目的は達成が困難である。2006年クーデタの目的であったタックシン派の撲滅は失敗に終わった。民主政治への復帰、総選挙の実施が国際的に要請される中、選挙を実施すればタックシン派が再び勝利をおさめる可能性が高い。選挙を否定し、純然たる軍事政権に転換しない限り、タックシン派を一掃するのは難しい。しかし、軍事政権の長期化は国際社会では容認されない。第三に、クーデタ後の政権がクーデタ前の政権よりも高い評価を得るとは限らない。スラユット政権への評価は惨憺たるものであった。タイの政権は、1990年代には90年代初頭のアーナン政権と比較され批判されることが多かったものの、今日ではタックシン政権との比較が必定である。国民生活の改善という点で同政権を上回るのは容易ではない。第四に、目的が達成されなければ、06年クーデタの指導者と同様な批判を浴びる。クーデタ決行によって、国際関係を悪化させ、経済状況にも打撃になったにもかかわらず、何もよいことがない。そうしたリスクを承知の上で、クーデタを決行するだけの誘因が軍首脳にはない。クーデタを決行しなければ、60歳の定年まで地位は安泰である。第五に、強引にクーデタを決行すれば、06年クーデタがそうであったように、裁可する立場にある国王への批判を招きかねない。クーデタのお膳立てをする連合が王室奉戴を声高に主張しているため、黒幕は王室ではないかという疑惑の目を国際社会から向けられる。クーデタは王室の護持を意図していても、むしろ王室を傷つけてしまう恐れがある。それは極力避けなければならない。

しかし、アヌボンは無為を許されなかった。「誰もが知っての通り、アヌボンは“操り人形”であり、ずっと忍耐強く軍事クーデタを拒否し続けていたものの、2008年12月の政権交代への荷担という形でのクーデタを実行せざるをえなかった。“尋常ではない”とい

うほかない黒幕からの圧力に抗しきれなかった⁽⁸²⁾」からである。ここに指摘されるように、政権交代は形を変えたクーデタであった。

これによって、軍隊は政権の見殺しから防衛へと姿勢を180度転換する。アヌボン陸軍総司令官は、2008年の連合と2009年の民主戦線では、軍隊の対応が全く異なったのではないかという批判や疑問について、2009年5月9日にラジオ放送のインタビューに答えた。まず、連合による首相府占拠後に非常事態が宣言されて出動命令が出た時、アヌボンはサマック首相に「できません」と伝えた。「力任せに排除に乗り出せば、水道を止め、電気を止め、空港を封鎖すると連合が脅していたからである。そんなことになれば国に大きな被害が生じる。もう1つには軍隊はデモ対策の装備が警察よりも貧弱であり、大規模な兵力を用いると死傷者が多数出てしまうからである。」次に、11月の空港封鎖については、政府は対策責任者に内務大臣を任命し、警察に対応責任を負わせていた。陸軍は出動命令を受けておらず、連合を排除しなかったのは警察と内務大臣の責任である。「10月7日には取締りをしながら、空港封鎖を放置した警察こそ、二重基準そのものである。」最後に、2009年4月については、軍隊は「集会を解散させたのではなく、秩序を維持しただけである。だから、首相府での集会は最後まで続けることを許した。その後も集会を続けていれば、「解散はさせなかった。包囲して新たな参加を認めないだけにとどめただろう。」また、秩序維持のための出動が必要になったのは、ASEANの会議を妨害し、首都の交通を遮断して甚大な被害をもたらしていたからであると説明した。空港封鎖の被害の方が甚大ではないかという質問には、正面からは答えず、陸軍の任務ではなかったと逃げた⁽⁸³⁾。

この弁明は、その場逃れではなく、周到に準備されたものではないかと想像される。それというのも、09年7月24日に国会の予算委員会に出席したアヌボンは、連合と民主戦線への対応が異なるのではないかという野党議員の質問に、首相府解放命令は拒否した、空港解放命令は受けなかった、民主戦線は暴力的であり甚大な被害をもたらしていた、と5月のインタビューと同様な説明をしたからである。アヌボンは、「軍隊に害が及ぶような命令には従わない」と述べ、委員を指さしながら「君たちこそ何色なのだ」と問い返した⁽⁸⁴⁾。

首相府占拠という内乱や反乱に相当する重大犯罪行為を前にして、電気や水道が止まること、死傷者が出ることを懸念して取締りを控えるというのは荒唐無稽である。後者については、2009年4月のように完全包囲により新規参加を阻止すれば、封鎖の解除はさしたる被害もなく可能であった。また、空港封鎖については、本稿で記したように、軍隊が出動を拒んだために、警察で対応せざるをえなかったのであり、軍隊に対する命令や要請がなかったわけではない。アヌボンは事実と反する言い訳をしている。

軍隊はこうした稚拙で説得力の乏しい言い訳しかできないほど、理不尽な政治関与を

重ねてきた。それを強いるものがいたからである。ワーサナーは、「2006年9月19日から今日 [2008年12月] までの間に明らかになってきたことの1つは、ソンティ・ブンヤラットクリン大將が断れずにクーデタを執行したということである。「命令」[を下したのが誰なのか] をめぐる噂が流れている。事件の背後にいる人物はいろんな層にいろんな分野にまたがっており、下の方の人物が少しずつ正体を現してきた。・・・背後にいるのが誰なのかを詮索する必要はない。口に出す必要もない。それでも、誰にも見えたのであり、分かったのである。自分で明確に判断できてしまった⁽⁸⁵⁾。」彼女は別の箇所では、「(2008年8月に連合が首相府を占拠した後にも) 政府側は強制排除をしなかった。これは連合を『コネのある群集』とみなしていたからである。それというのも、連合が王室を引き合いに出し、指導者のソンティ・リムトーンクンが王妃から拝領したと称する『水色のスカーフ』を首に巻いていたからである。ソンティの言動は噂や誤解の元であった」と記している⁽⁸⁶⁾。

これは、政府の軍隊ではなく、国王の軍隊という主張と符合しているように思われる。ブレイム枢密院議長は2006年に「国防政策や安全保障政策といった大きな政策は10年、20年単位で策定されているので、4年の任期しかない政権は、国防省、国家安全保障会議あるいはその他関連機関の政策に基づいて行動しなければならない。そうした長期政策を変更するというのは非常に難しいことである」と語って、政権からの軍隊の自律性を強調した。さらに、彼によれば、「職業軍人」とは政治や政治家とは関わらない「国王陛下の軍人」であった⁽⁸⁷⁾。国王への敬愛を示すリストバンドを軍首脳では最初に身につけたチャリット空軍総司令官⁽⁸⁸⁾は、「国王陛下の軍人なので、政府によって解任されるはずがない」と発言したことがある⁽⁸⁹⁾。政府よりも王室を優先するというのは、軍隊が王室の私兵というのと大差がなかろう。

この点に関連して興味深いのは、王室の中でも、王妃に近い将校が陸軍の主導権を握りつつあるという事実である。第1管区司令官が3名続いて第2歩兵師団長から出てくるのは前代未聞の珍事である。第1師団の生え抜きの将校ということになると、2003年に第1管区司令官になったパイサーンが最後である。しかも、パイサーンの前任者は第2歩兵師団長経験者のプラウィットであった。つまり、2002年以後は03年から05年にかけての2年間を除くと、第2歩兵師団出身者が第1管区司令官を務めていることになる。アヌポンはプラユットとともに王妃警護部隊の第21歩兵連隊長経験者であり、第2歩兵師団人脈の主流派である。政治に激変が生じない限り、10年9月のアヌポン退役後に総司令官就任が確実視されるプラユットの定年は14年9月である。プラユットの後継者として浮上してくるのも第2歩兵師団出身者である可能性が高い。軍人はみな王室への忠誠心が強く、特に第2歩兵師団人脈の将校は「お母さん」への忠誠心が格段に強い。このことが、第2歩兵師団出身者の目覚ましい台頭を助ける要因ともなっているように思われる。

しかしながら、陸軍において最高のエリートコースは第2歩兵師団ではない。それは第1師団であった。とりわけ首都駐屯の第1歩兵連隊と第11歩兵連隊は有力軍人の子弟もしくははきわめて優秀なものたちが占めてきた。たとえば2006年クーデタ当時の第1歩兵連隊の第2大隊長は90年代の陸軍総司令官チェーターの息子、第3大隊長は90年代の陸軍副総司令官サンの息子であり、07年10月に第11歩兵連隊長に任命されたのは90年代の最高司令官ストーンの子息であった。ところが、06年クーデタ以後は第2歩兵師団出身者が第1管区の中枢部を握り、さらに陸軍の中枢部も握るようになっていく。第1師団は出世コースではなくなったのである。この状況に第1師団の将校が不満を抱いたとしても、何ら不思議ではなからう⁽⁹⁰⁾。

アヌボンが否定しても、2006年以後軍隊には反タックシン色がついている。反タックシン色を脱色しない限り、反タックシン派への協力を拒めない。反タックシン勢力が選挙で勝てる目処がつかない限り、軍隊は政治への介入を要請される。軍隊が政治から撤退しようとするれば、反タックシン色を消す必要がある。それはタックシン色に染まることではない。中立になることである。選挙で選ばれた正当な政権の統制に服する、つまり文民統制に服するということである。それを実現する方法は2つであろう。1つは反タックシン勢力にかかっている。反タックシン勢力が反タックシンではない政権を容認するのかどうか。それは、反タックシン勢力が民主主義や法治主義のルールから外れた政治介入を止めることを意味している。もう1つは、軍隊が反タックシン勢力との心中を嫌って組織防衛のために自ら反タックシン色を消し去ることである。政治的人為的に築き上げられた第2歩兵師団主導体制への不満と軌を一つにする可能性がある。どちらが先に生じるかは予断を許さないものの、それが生じたときは軍隊が政治から再び退場することになる。勝利のためにはルールなき場外乱闘に乗り出す政治手法に終止符を打てば、政治は民主化の軌道に復帰し、安定を取り戻せるであろう。

*本稿は拙稿『『クーデタはやらない』：2006年クーデタ後のタイにおける政軍関係』『グローバル化時代の民主化と政軍関係に関する地域間比較研究』（平成19～平成20年度科学研究費補助金（基盤研究(B)）成果報告書、2009年3月、1-43頁）を抜本的に加筆修正したものである。

注

- (1) Chang Noi, "Military Biggest Winner in Political Conflict", *The Nation*, 2 Feb 2009. なお、本稿で用いる日刊紙はすべてオンライン版である。
- (2) Watsana Nanuam, *Lap luang phrang phak 2: Son rup patiwat hak liam* (Bangkok: Matichon, 2009), pp.61-62.

- (3) Watsana, *phak 2*, pp.65-67.
- (4) 人事権については拙稿「タイのクーデタ、1980-1991年」『東南アジア研究』29巻4号: 392, 394-395頁を参照されたい。前述のように、将官の人事権は2008年2月に国防大臣から人事委員会に移った。総司令官の人事権が強化されたことになる。
- (5) チェーター(1962年任官)は第1歩兵連隊第1大隊長などの第1師団勤務を経て、81年に第2歩兵師団、86年に第9歩兵師団と第1管区内での転勤の後、88年に第2管区の第6歩兵師団長に就任し、90年には第1管区に戻った。若くして第2管区勤務となり、総司令官に上り詰めたのはプレームが唯一の事例である。
- (6) 軍士官学校の卒業生は政界には他にもいる。しかし、その多くは定年退職して政界入りしている。彼らの同級生はすでに退職しており、残っているのは後輩や部下に過ぎない。他方、定年を待たずに早々に退職して、すぐに政界入りしたものは資金力がなく、政界でタックシンのような勢力を築けない。
- (7) 権力基盤がもつばら有権者ならびにその代表者が集う国会へ移ると、政治指導者はもはや軍隊には依存しないので、その政治的な主張や要求に耳を傾ける必要がない。政治家が耳を貸さねば、政治への発言力が低下する。政治力が落ちれば、経済界などから口利きを依頼されることもない。すると、集金力も低下する。これが、軍隊の政治的凋落、言い方を変えたと文民統制強化の基本的な仕組みであろう。
- (8) *Matichon*, 31 Aug 2006; *Matichon*, 11 Sep 2006.
- (9) Ukrist Pathmanand, "A Different Coup d'État?", *Journal of Contemporary Asia*, 38(1) (February 2008): 127.
- (10) 師団長の人数が異なるのは、第2特殊戦争師団が2001年に廃止されたためである。
- (11) ただし、2006年9月にクーデタが生じていなければ、同年10月に陸士21期生が第3管区と特殊戦争部隊の司令官に就任するのはほぼ確実であった。
- (12) 陸士12期生のスラユットは40歳代後半で管区司令官に就任したほか、陸士5期生で後に陸軍総司令官に就任するイッサラボンやウィモンは40歳代末に師団長に就任している。
- (13) *Matichon*, 19 Jul 2006.
- (14) ただし、任期1年で国軍最高司令官に棚上げし、後任にプラウィットを据えたのは、盲目的な親族最良ではなかったという証拠であろう。
- (15) 実行派は、事前の読みが外れて劣位にとどまれば、戦わずして投降することになり、裁可を仰ぐには至らない。支持派と反対派が拮抗する場合には、国王がいずれに荷担するかが成否にとって決定的に重要になる。
- (16) プレームは「国王とチャート(chat)」と述べた。チャートが政府ではないとすれば、王室もしくは国王の国家を指していることになる。
- (17) *Matichon*, 20 Jul 2006.
- (18) Watsana Nanuam, *Lap luang phrang: Patiwat prasat sai* (Bangkok: Matichon, 2008), p.145. 7月の異動で特に重要なのは、首都に駐屯する戦車部隊である第1師団第4騎兵大隊長を務めていた第2騎兵師団長の娘婿が更迭され、歩兵部隊としてもっとも重要な第1師団第1歩兵連隊第1大隊長には第1管区司令官の副官が任命されたことである。
- (19) Watsana, *Patiwat prasat sai*, pp. 139-143.
- (20) *Nation Sutsapda*, 13 Oct 2006.
- (21) Watsana, *Patiwat prasat sai*, p.145.
- (22) *Bangkok Post*, 24 Sep 2006.
- (23) Watsana, *Patiwat prasat sai*, pp.178-179も参照。
- (24) なお、91年クーデタでは金額が10分の1であった。Watsana, *Patiwat prasat sai*, pp.61, 83-85, 117. クーデタに参加するどころか、タックシン派として身柄を拘束された空軍地上部隊司令官も30万バーツを支給された。Watsana, *phak 2*, p. 150. その空軍幹部は退役後の2009年10月にマティジョン紙のインタビューで、政党へ献金しておき、後に回収するというそれまでの仕組みがタックシン政権下では機能しなくなったことに不満を抱く資本家たちが政権打倒のための資金を提供したと述べている。*Matichon*, 12 Oct 2009.
- (25) Chai-Anan Samudavanija, *The Thai Young Turks* (Singapore: ISEAS, 1982), pp.46, 65.
- (26) Pasuk Phongpaichit and Chris Baker, *Thaksin, second expanded edition* (Chiang Mai: Silkworm Books, 2009), p. 284.

- (27) Watsana, *Patiwat prasat sai*, pp.106-107, 113.
- (28) チトラダー宮殿で待ち受けていたプレーム枢密院議長がCDRを先導した。謁見がプレームの率先によるのか、CDR側からの依頼によるのか、ソントィは「記憶にない」と言葉を濁している。Watsana, *Patiwat prasat sai*, pp.186-187. 前者というわけである。
- (29) クーデタ当時ニューヨークに滞在していたタックシンは、支持派の部隊を動員して対抗しようとした。しかし、ワーサナーによると、「タックシンはタイから国際電話を受けた。それは彼に抵抗を断念させる重要な電話であった。」訪米に同行しており、王室に近いことで有名なスラキアト外務大臣も「誰がクーデタの背後にいるのかをよく知っており、タックシンに負けを認めるように忠告した。」Watsana Nanuam, *Amata haeng prem: Cak patiwat 19 kanya thung cutcop "Thaksin"* (Bangkok: Post Books, 2008), p.82.
- (30) 同期生であるからといって、関係が緊密であったわけではない。
- (31) Watsan, *Patiwat prasat sai*, pp.163-172, 332-333, Watsana, *phak 2*, p.71-72, 271.
- (32) Watsan, *Patiwat prasat sai*, pp.41-48.
- (33) 成績優秀者のほかに、毛並みのよいもの(一世代前の陸軍幹部の息子)も首都の部隊に配属されることが多い。
- (34) ただし、退役時に別の将校を後継者候補として推薦したため、同期生ソントィとは不仲と言われている。Watsan, *Patiwat prasat sai*, p.319, Watsana, *phak 2*, p.188.
- (35) 比較の事例をあげよう。2006年10月の人事異動で第1師団長に就任したダーボン(23期生)が07年10月には第1管区副司令官、08年10月には作戦担当の陸軍参謀長補佐になった。それに対して、2005年10月に第2歩兵師団長に就任していたカニット(24期生)はダーボンに半年遅れて08年4月に第1管区副司令官になったものの、08年10月には第1管区司令官に昇進した。第1管区司令官と参謀長補佐はいずれも中將ながら、実戦部隊指揮官コースを歩んできたものにとっては、明らかに管区司令官のほうが魅力的である。
- (36) Watsana, *phak 2*, p.205.
- (37) *Matichon*, 30 Mar 2008.
- (38) *Matichon*, 31 Mar 2008.
- (39) *Krungthep Thurakit*, 26 Apr 2008.
- (40) 連合の2008年の活動については、拙稿「どう政権を倒したのか：2008年のタイ政治」『海外事情』2009年4月号、71-89頁を参照されたい。
- (41) *Matichon*, 29 May 2008; *Thai Rat*, 29 May 2008.
- (42) *Bangkok Post*, 29 May 2008.
- (43) *Thai Post*, 2 Jun 2008.
- (44) *Matichon*, 10 Jul 2008.
- (45) *Matichon*, 4 Sep 2008.
- (46) *Prachathai*, uploaded 2 Sep 2008.
- (47) *Matichon*, 5 Sep 2008.
- (48) *The Nation*, 6 Sep 2008.
- (49) *Matichon*, 6 Sep 2008.
- (50) *Bangkok Post*, 6 Sep 2008.
- (51) *Matichon*, 6 Sep 2008.
- (52) *Matichon*, 8 Oct 2008.
- (53) Watsana, *phak 2*, pp.52-53, 289, Watsana Nanuam, *Lap luang phrang: Phak phitsadan* (Bangkok: Post Books, 2008), p.104.
- (54) *Matichon*, 11 Oct 2008. ワーサナーはアヌボンの消極姿勢の理由として、2006年は陸軍総司令官への扉が開くので危険を冒す値打ちがあったものの、08年はすでに総司令官に就任しており、あえて危険を冒す必要を感じなかったからと説明する。Watsana *Phak phitsadan*, p. 105.
- (55) *Matichon*, 17 Oct 2008.
- (56) *Matichon*, 18 Oct 2008.
- (57) *Bangkok Post*, 20 Oct 2008.
- (58) Wassana Nanuam, "The coup on television that never was", *Bangkok Post*, 31 Oct 2008.
- (59) *The Nation*, 8 Oct 2008 ; *Matichon* 8 Oct 2008.
- (60) *Bangkok Post*, 9 Oct 2008.

- (61) *Phucatkan Online*, 9 Oct 2008.
- (62) *Daily News*, 13 Oct 2008; *The Nation*, 14 Oct 2008.
- (63) Watsana, *phak 2*, pp.53, 62.
- (64) *Krungthep Thurakit*, 20 Nov 2008.
- (65) *Matichon*, 22 Nov 2008.
- (66) *Matichon*, 26 Nov 2008.
- (67) *Matichon*, 26 Nov 2008.
- (68) *Matichon*, 26 Nov 2008.
- (69) *Matichon*, 27 Nov 2008.
- (70) Chalao Kancana, “Mop yut suwannaphum thahan sua hai pai nai” , *Krungthep Thurakit*, 27 Nov 2008.
- (71) Watsana, *phak 2*, pp.65-67, 278.
- (72) Watsana, *phak 2*, pp.57-59.
- (73) 下院事務局長が12月5日に明らかにした数字である。 *Matichon*, 6 Dec 2008.
- (74) Watsana, *phak 2*, pp.71-72.
- (75) ワーサナーによると、この政権樹立工作においてとりわけ重要なのはネーウィンの実父で下院議長を務めるチャイが枢密院議長を訪問していたことである。 Watsana, *Phak phitsadan* , p.121, Wassana Nanuam, “Govt hopefuls rendezvous with Anupong ‘the manager’” , *Bangkok Post*, 11 Dec 2008も参照。
- (76) *Krungthep Thurakit*, 13 Dec 2008; *Matichon*, 13 Dec 2008; *Thai Post*, 13 Dec 2008.
- (77) Pracha Buraphawithi, “Patiwat baep pok” , *Krungthep Thurakit*, 12 Dec 2008. なお軍首脳からみて「大物」は政党政治家や軍人には存在しえない。遠慮せざるをえない大物は、恩人のプラウィットを除くと、王室や枢密院の関係者に限られるであろう。
- (78) Watsana, *phak 2*, p.336.
- (79) Nostitz, Nick, *Red vs. Yellow, Volume 1: Thailand’s crisis of identity* (Bangkok: White Lotus, 2009).
- (80) Pravitt Rojanaphruk, “Talk of a coup is illegal and clearly highly disturbing” , *The Nation*, 28 May 2008.
- (81) Chalit Kitiyansap, “Ya chai sathaban pu thang rattthaprahan” , *Matichon*, 10 May 2008.
- (82) Watsana, *phak 2*, p. 39.
- (83) *Matichon*, 10 May 2009. Wassana Nanuam, “Army Chief Shoots Down Talk of Double Standards” , *Bangkok Post*, 10 May 2009も参照。
- (84) *Thai Post*, 25 July 2009; *Thai Rat*, 25 July 2009.
- (85) Watsana *Phak phitsadan*, p. 157.
- (86) Watsana *Phak phitsadan*, p.102.
- (87) Watsana, *Amata*, pp.100-101.
- (88) Watsana, *Patiwat prasat sai*, p.177.
- (89) Watsana, *Patiwat prasat sai*, p.91.
- (90) Watsana, *phak 2*, pp.212-214.

